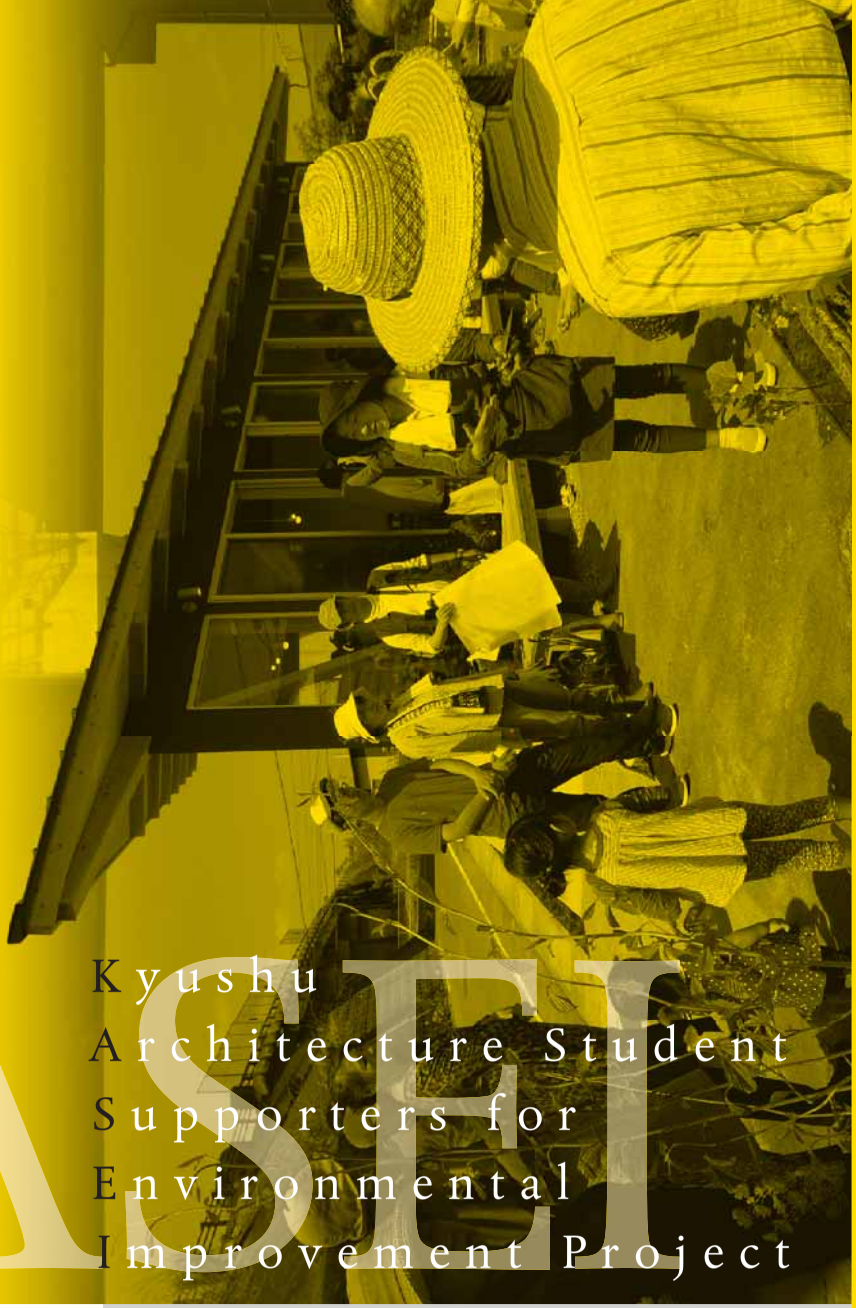


KASEI

Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEIプロジェクト年次報告2018

Annual Report 2018

KASEIプロジェクト実行委員会

目次
Contents

02 KASEI実行委員長挨拶
03 KASEI学生代表挨拶
04 熊本地震現状
06 KASEI活動拠点マップ（熊本地震）
08 KASEI活動一覧
10 九州北部豪雨現状
11 KASEI活動拠点マップ（九州北部豪雨）

12 活動事例：
朝倉市林田
15 みんなの家アーカイブ
25 団地ドローイング
51 **KASEI**制作物図鑑
64 組手什ワークショップ
66 第12回KASEI実行委員会
気づきワークショップ
70 論考：
熊本型D、その途中
72 KASEIに関する論文のアトラス

74 年間スケジュール
75 メディアスクラップ
活動助成
76 メンバー 一覧
78 編集後記

実行委員長挨拶
Introduction of Executive chairman

末廣 香織　Kaoru SUEHIRO
九州大学大学院 人間環境学研究院 都市・建築学部門 准教授

はじめに

2016年7月にKASEIプロジェクトを立ち上げてから、既に3年以上が経過しました。熊本地震の被災地に建てられた仮設住宅の環境改善を目的として立ち上がった活動ですが、時間の経過とともにその活動内容も変化してきました。1年目は、あちこちの団地が整備されると同時に、家具や植栽などを住民の方々と一緒に制作したり、団地イベントのお手伝いをしたりという活動が求められ、組織の立ち上げからネットワークづくりも含めて、非常に忙しい時期でした。2年目になると、初期の活動や各団地の生活状況も一段落して、定期的なイベント補助や追加整備された「みんなの家」のサポートといった活動へと移行してきました。そして3年目以降は、こうした団地の状況を記録し、研究としてもまとめる段階に入っています。当初約4300戸が整備された熊本地震被災地の仮設住宅団地からも、既に大半の方が退去し、2019年9月現在で1100戸あまりが残るだけになっています[*1]。また、同じくKASEIで支援してきた2017年九州北部豪雨の仮設住宅団地も2年を経過した今年解体されました。こうした状況から、KASEIの活動も本報告書をまとめた段階で一旦休止し、今後はこれまで蓄積してきた知見や大学を超えたネットワークの活用に活動を限定してゆくことになりました。これまでKASEI活動を物心両面から支援していただいたみなさま、また活動に参加していただいた学生、教員のみなさま、本当にありがとうございました。

しかし、近年は本当に多くの災害が日本を襲っています。東日本大震災の傷が癒えないうちに起きた熊本地震、そして九州北部豪雨、さらに2018年の西日本豪雨（平成30年7月豪雨）、大阪府北部地震、北海道胆振東部地震、2019年の台風15号・19号等々。毎年のように大きな災害が起きています。テレビ等のニュースでは、こうした災害情報が日常化してしまい、私たちも少々のことでは驚かなくなっている気がします。しかし、現実に被害に遭われた方たちにとってみれば本当に大変な状況であることに変わりはありません。

熊本県の蒲島知事は、熊本地震以降、被災者の「痛みの最小化」に取り組むと同時に、単なる復旧ではなく「創造的復興」[*2]を目標に掲げて活動を続けてきました。この目標は、どのような被災地においても共通に掲げられるべきものだと思います。私たちは、KASEIの活動を通じて、特に少子高齢化が進んで経済的にも疲弊する地方では、被災したときに地域が抱える問題が一気に表面化してくることを目にしてきました。つまり、被災後に元に戻す「復旧」をしたところで、地域の課題は何も解決しないということです。被災という大きな痛みをむしろきっかけにして、次の時代へとつながる「創造」をしなければならないのです。建築を専門としている私たちが、具体的にどのような被災者支援ができるのか、どのように復興の手助けをすべきなのか、正直分からないことだらけです。ただ一つ言えるのは、これまでの活動や研究の内容をまとめて、できるだけ知見を共有しておくこと、また次の災害に備えて何らかの制度や組織を準備しておくことが、被災者の「痛みの最小化」と地域の「創造的復興」につながるだろうということです。

さて、熊本地震という大災害の衝撃から、当初は何も分からないままに走り出した活動でしたが、この3年あまりを振り返ってみると、いくつかの貴重なデータと知見が得られたように思います。本報告書では、これまでの活動内容を中心にこうした情報をまとめています。2016年度、2017年度の報告書も併せて、今後また起こるであろう災害に対して有効に活用していただけることを願っています。

＊1　応急仮設住宅等の入居状況について（令和元年9月30日現在）
https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=29399&sub_id=1&flid=208419
＊2　第3回 平成28年熊本地震復旧・復興本部会議 資料
https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=16242&sub_id=3&flid=81846

学生代表挨拶
Introduction of Representative student

荒木 俊輔　Shunsuke ARAKI
2019年度 学生代表
九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻 修士課程

KASEIプロジェクトも今年で四年目となり、報告書も3冊目となりました。建築学科の学生として被災地に対してなにかできないか、という想いでKASEIが発足し、活動を続けてまいりました。1年目には、みんなの家設計の手伝いや家具の製作、外構の整備などを行ない、2、3年目には支援活動に加えて、仮設住宅居住者へのアンケート実施やみんなの家使われ方調査を行い、生活実態の記録も行ってきました。

現在では発足当時から学生が入れ替わり、また、仮設住宅も閉鎖が始まっています。自宅再建や災害公営住宅の建設が続々と進み、生活の場を支援するあり方が問われるようになりました。私自身も、発足当時から活動に参加していたわけではなく、被災地・仮設住宅団地がどのように変遷をたどったのか、自分の目で見たわけではありません。しかし、KASEIの活動を通し、多くの住民の方と話す中で、「継続して活動をし続ける」ことが重要なのではないかと感じるようになりました。支援や活動の内容などは当初より変化しましたが、実際に被災地に赴き、住民の方と交流をする、少しでも元気をお届けすることも、KASEIの役割なのではないかと思っています。

仮設住宅団地も完全閉鎖が近づき、被災地に赴くボランティアの数、そして仮設団地の住民の数も減少しています。復興が進み、それぞれの生活が成立する過程では、あまり支援と呼べるものは難しいかもしれません。それでも、まだまだ自立再建ができていない方、支援が必要な方も多くいます。仮設住宅団地からそれぞれの地域へ、または災害公営住宅などに生活の場が移行していきますが、今までの活動でできた縁を大切にし、これからもなんらかのかたちで支援を続けていくべきだと感じています。

KASEIとしての活動は今年度で締めとなります。すべての仮設住宅団地が閉鎖するまでの間は、研究室ごとに個別に活動を行なっていくことになります。しかし、今後も情報共有などは継続して行い、少しでも復興の力になれるよう尽力していきます。よろしくお願いします。

熊本地震現状

Present situation of Kumamoto earthquake

野口 雄太　Yuta NOGUCHI
九州大学大学院 人間環境学府 都市共生デザイン専攻 博士後期課程

2016年4月に発生した熊本地震から3年あまりが経過し、被災地は日常の風景を取り戻しつつある。熊本県の発表によれば[*1]、2019年9月末時点で仮設住宅の入居世帯数は、建設型で1,131世帯、借上型で1,990世帯となった。建設型の整備が完了した2016年末の数と比較すれば、既に8割の入居世帯が恒久的な住まいへと生活の場を移していることになる。昨年の報告書では、その復興を後押しするように災害公営住宅の供給と木造仮設の転用が始まっていると述べたが、以下ではその2つの住宅供給が現在どのように進んでいるか、改めてここで報告したい。

災害公営住宅は、県下で70団地1,715戸が整備予定であり、うち、39団地767戸（約45%）が竣工し、恒久的な住まいとして提供されている。その他の団地も既に起工しており、2019年内もしくは2020年3月までにすべての災害公営住宅の供給が完了する見通しであるという[*2]。では、実際にどのような住宅が建設されているのだろうか。熊本県における災害公営住宅を概観すると、5～6戸で1団地というかなり小規模な団地が数多くあることに気がつく。昨年の報告書執筆時点では47団地1,733戸が整備される予定であると述べたが、供給戸数はほぼ一定にも関わらず団地数は増加しており、ここからも小規模な団地へと計画変更されたことが伺える。確かに、50戸を越えるような大型の団地は6団地に留まり、20戸以下のものが47団地と半数以上を占める。小規模な団地のなかでも目を引くのは、被災した既成住宅地あるいは集落などのなかにインフィル的に供給される災害公営住宅の存在であろう。宇土市の境目団地[*3]や益城町の島田地区[*4]などを例に挙げれば、どちらもその地区の従来の環境のなかに災害公営住宅を挿入することを通して周辺環境を再編し、地区全体の復興後の姿を描く計画である。既に竣工した境目団地（写真1）では、その災害公営住宅のみならず、木造仮設の転用、仮設へのプッシュ型みんなの家の供給なども合わせて、被災以前から公営住宅が集積していた同地区の住宅地としての質を高めることに成功している。一方の島田地区では、当初は周辺からやや孤立した位置に大規模な団地が計画されていたというが、現在は既成集落のなかに分散して小規模な3つの団地が計画されている。その供給を通して、周辺に広場や生活動線などの空間を提供すると同時に、公営住宅の入居者が地域のコミュニティなかに包摂されることが期待される。また、嘉島町や御船町などでは、被災した各集落内の公園へ仮設住宅が建設されるなど、仮設供給の時点で既にインフィル的な団地を実現しており、災害公営住宅もある程度集落ごとに建設されるなど、被災者らの被災前後の環境移行の負荷を小さなものに留めるような計画が実現している。

他方で、木造仮設住宅もまた、転用を通して被災者らの復興後の生活を支えるよう機能し始めている。県内に供給された31団地683戸の木造仮設住宅のうち、現時点では半数程度が転用されるかその予定であるという。おおむね転用は、仮設的な利用を終えた木造仮設を県が市町村に譲渡し、各自治体が市町村有の住宅として運用する形で進められる。そのため、転用に際する改修工事やそのタイミングなどは市町村ごとに異なる。比較的早い段階で譲渡を受けた西原村を例に挙げれば、木造仮設の転用は、災害公営住宅の竣工と仮設住宅の集約と時期を調整しながら実施された。仮設住宅として5団地312戸が一体的に建設された西原村小森団地は、団地の一角に50戸の木造仮設を有する。西原村では、先に竣工したこの木造仮設に要配慮者を優先的に入居させ、その他のプレハブ仮設に被災以前の居住地区ごとに被災者がまとまって入居するコミュニティ継続型の対応をとった。被災から2年ほどが経過し、災害公営住宅が竣工、自力再建も幾分か進んだ頃には、小森団地全体の入居率が4割を切る状況となったが、団地内の空き家には位置の偏りが生まれていた。それは被災以前の居住地区の被害の程度により、被害の小さな地区では住宅の補修や再建が完了し、仮設からの転出がまとまって現れる部分がある一方で、被害の大きかった地区ではようやく土地自体の復旧工事が始まるか否かという時期にあり、仮設的な利用が継続する部分も存在するためである。このような状況のもとで仮設の集約を計画する必要性も出てきた。村は、かねてより各被災世帯の再建の意向調査を通して、それぞれの再建がどのような形で果たされるのか量的に把握することに努めており、その過程で災害公営住宅よりも家賃を低く設定できる木造仮設の転用住宅に一定の需要が見込まれることを把握している。その後、県から木造仮設を譲渡された村は、既に空き住戸となった木造仮設の改修工事に着手、完了後にはプレハブから木造への転居を支援し、公有住宅としての運用を開始している。他方で、集約先のプレハブ仮設への、解体されるプレハブからの転居あるいは木造からの転居に対する支援も実施している。これにより、木造仮設は恒久的な住まいへ、プレハブ仮設は長期化する仮設的な住まいへと再編されることとなった。また、木造仮設の改修工事は、入居者がそこで生活を続けながら行えるよう工夫が施されていた。即ち、住棟裏側に位置する居室の濡れ縁にステップを設け、スムーズな出入りが行える動線を確保したうえで玄関周りの室内化などの改修を行っている（写真2）。他の市町村については、まだ譲渡や転用の途上にあるため総括的な話をすることは難しいが、木造仮設は各地の復興の進展や実情に合わせ、仮設利用の継続・解体・転用と柔軟な運用が可能な空間的資源として機能していると言えるのではないだろうか。

このように熊本県では現在、各被災世帯がおかれた状況に合わせ、みなしを含めた仮設住宅、復興公営住宅、木造転用の公有住宅と、結果として重層的な公的住宅の運用が行われている。そしてそれらは、仮設・恒久住宅それぞれの供給のタイミングで計画され実現したものではあるが、実態としてはその双方の時期にまたがって独自の役割を果たし続けている。KASEIは進展する仮設団地の解体（写真3）とともに、その役割を終えつつあるが、熊本での事例の検証と支援の方法論をまとめることを通して、次なる被災地での実践につながるよう努めていきたい。

写真1 境目団地災害公営住宅　後ろに見える中低層は既存の公営住宅である

写真2 恒久的な装いに改修された木造仮設転用住宅

写真3 役割を終え解体が進む仮設住宅

*1　熊本県：応急仮設住宅等の入居状況について（令和元年9月30日現在）
https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_29399.html、2019.10.1参照

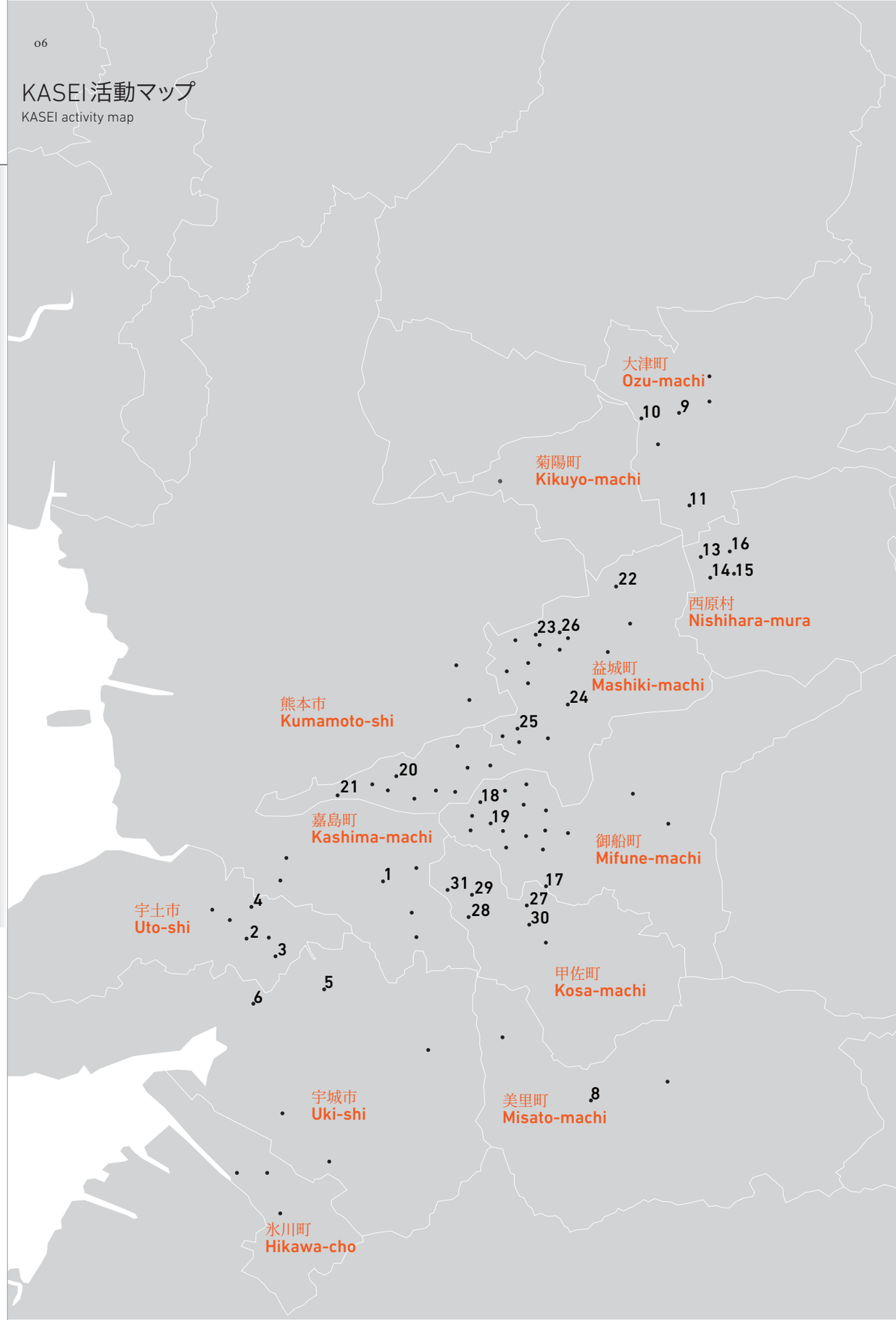
*2　熊本県：災害公営住宅の整備状況について（令和元年9月30日時点）
https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_19145.html、2019.10.1参照

*3　熊本県：宇土市営境目団地災害公営住宅
https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_18962.html、2019.10.1参照

*4　益城町：島田地区 買取型災害公営住宅事業者募集要項等について
https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0032784/、2019.10.1参照

KASEI活動マップ

KASEI activity map



1. 城南町さんさん2丁目 | Jonan-machi sansan2-chome
   九州産業大学 | Kyushu Sangyo University
2. 境目1 | Sakaime-1
   鹿児島大学 | Kagoshima University
3. 境目3 | Sakaime-3
   山口大学 | Yamaguchi University
4. 新松原 | Shin-matsubara
   九州大学 | Kyusyu University
5. 当尾 | Tounoo
   鹿児島大学 | Kagoshima University
6. 御嶺 | Goryo
   九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
7. 内牧 | Uchinomaki
   九州産業大学 | Kyushu Sangyo University
8. くすのき平 | Kusunoki-daira
   大阪工業大学 | Osaka Institute of Technology
9. 室第二 | Muro
   九州大学 | Kyushu University
   福岡大学 | Fukuoka University
   九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
10. 室南出口 | Muro-minami deguchi
    九州大学 | Kyushu University
    福岡大学 | Fukuoka University
    九州工業大学 Kyushu Institute of Technology
11. 岩坂 | Iwasaka
    九州大学 | Kyushu University
    福岡大学 | Fukuoka University
    九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
12. 陽ノ丘 | Hinooka
    九州大学 | Kyushu University
    福岡大学 | Fukuoka University
    九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
13. 小森1 | Komori-1
    長崎大学 | Nagasaki University
14. 小森2 | Komori-2
    九州大学 | Kyushu University
15. 小森3 | Komori-3
    西日本工業大学 | Nishinippon Institute of Technology
16. 小森4 | Komori-4
    佐賀大学 | Saga University
17. 玉虫 | Tamamushi
    大阪市立大学 | Osaka City University
18. 甘木 | Amagi
    大阪市立大学 | Osaka City University
19. 東小坂 | Higashikosaka
    熊本大学 | Kumamoto University
20. 近隣公園 | Kinrin koen
    崇城大学 | Sojo University
21. 下仲間公園 | Shimonakama koen
    崇城大学 | Sojo University
22. テクノ | Tekuno
    熊本県立大学 | Prefectural University of Kumamoto,
    有明工業高等専門学校 | National Institute of Technology, Ariake College
23. 安永 | Yasunaga
    九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
24. 飯野 | Iino
    九州工業大学 | Kyushu Institute of Technology
25. 小池島田 | Oike-shimada
    崇城大学 | Sojo University
26. 木山 | Kiyama
    山口大学 | Yamaguchi University
27. 白旗 | Shirahata
    九州大学 | Kyushu University,
    熊本高等専門学校 | National Institute of Technology , Kumamoto College
28. 白旗第2 | Shirahata dai-2
    九州大学 | Kyushu University,
    熊本高等専門学校 | National Institute of Technology , Kumamoto College
29. 乙女 | Otome
    九州大学 | Kyushu University,
    熊本高等専門学校 | National Institute of Technology , Kumamoto College
30. 乙女第2 | Otome dai-2
    九州大学 | Kyushu University,
    熊本高等専門学校 | National Institute of Technology , Kumamoto College
31. 乙女第3 | Otome dai-3
    九州大学 | Kyushu University,
    熊本高等専門学校 | National Institute of Technology , Kumamoto College

KASEI活動一覧

KASEI activities list

- 活動日
  活動団地
  活動内容
  大学研究室

- **2018.04.01**
  大津町室第二仮設団地
  「みんなの家」完成イベント
  九州工業大学
  福岡大学四ヶ所研

- **2018.04.03**
  甲佐町災害公営住宅
  第二回ベンチモックアップ
  九州大学末廣研

- **2018.04.05**
  益城町テクノ団地
  自治会参加
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.04.14**
  益城町テクノ団地
  発災2年追悼の集い
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.04.21**
  大津町室第二仮設団地
  組手什・すだれWS
  福岡大学四ヶ所研、九州工業大学

- **2018.04.22**
  宇土市新松原団地
  みんなの家完成パーティー
  九州大学田上研

- **2018.04.22**
  朝倉林田団地・宮野団地・東峰村団地
  雨よけ設計・現地観察
  九州大学末廣研

- **2018.04.29**
  甲佐町白旗団地
  グリーンカーテンWS
  九州大学末廣研

- **2018.05.26**
  朝倉市林田団地
  集会所雨よけ作り
  九州大学末廣研・菊地研
  福岡大学

- **2018.05.31**
  宇城市小川団地
  組手什WS
  鹿児島大学大鷹野研

- **2018.06.07**
  益城町テクノ団地
  自治会参加

- **2018.06.16**
  熊本市さんさん2丁目団地
  そうめん流し・スロープ手すり設置
  九州産業大学矢作研

- **2018.06.16**
  益城町テクノ団地
  コンソーシアム兵庫との打ち合わせ
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.07.18**
  南阿蘇村岩坂団地
  夏祭り
  九州大学田上研

- **2018.07.22**
  南出口団地
  夏祭り
  福岡大学四ヶ所研

- **2018.07.25**
  甲佐町内の仮設団地
  360° カメラ撮影・ヒアリング
  九州大学末廣研

- **2018.07.27**
  甲佐町内の仮設団地
  360° カメラ撮影・ヒアリング
  九州大学末廣研

- **2018.07.28**
  甲佐町内の仮設団地
  360° カメラ撮影・ヒアリング
  九州大学末廣研

- **2018.08.04**
  朝倉市林田団地
  組手什WS
  九州大学末廣研・菊地研

- **2018.08.05**
  朝倉市林田団地
  竹灯籠
  九州大学末廣研・菊地研

- **2018.08.18**
  甲佐町白旗団地
  夏祭り
  九州大学末廣研

- **2018.08.20-22**
  益城町テクノ団地
  緑台拡張
  熊本県立大学佐藤研・芝浦工業大学

- **2018.08.23**
  甲佐町内
  災害公営ロゴマーク作成WS
  熊本県立大学佐藤研
  芝浦工業大学
  九州大学末廣研

- **2018.09.22**
  朝倉市林田団地
  組手什WS
  九州大学末廣研・菊地研

- **2018.10.13**
  益城町テクノ団地
  秋祭り
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.10.20**
  朝倉市林田団地
  組手什WS
  九州大学末廣研・菊地研

- **2018.11.01**
  益城町テクノ団地
  自治会参加
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.11.11**
  阿蘇市内牧団地
  ヒアリング
  九州大学矢作研

- **2018.11.14**
  阿蘇市
  360° カメラ撮影
  九州大学末廣研

- **2018.11.22**
  益城町テクノ団地
  団地ドローイング
  熊本県立大学佐藤研

- **2018.11.24**
  室第二団地
  東屋ビニールガーデン設置
  福岡大学

- **2018.11.25**
  熊本市さんさん2丁目団地
  手摺、靴箱制作
  九州産業大学

- **2018.12.20**
  小森第一団地
  カフェ豚汁作り
  長崎大学大安武研

- **2018.12.23**
  朝倉市林田団地
  餅つき手伝い
  九州大学末廣研・菊地研

- **2019.01.18**
  東峰村団地
  視察
  九州大学末廣研

- **2019.02.11**
  熊本市さんさん2丁目団地
  アルバム作りWS
  九州産業大学

- **2019.02.16**
  甲佐町白旗団地
  アルバム作りWS
  九州大学末廣研

- **2019.02.23**
  嘉島町北甘木地区
  みんなの家上棟式準備
  九州大学末廣研・菊地研・田上研

- **2019.02.24**
  嘉島町北甘木地区
  みんなの家上棟式
  九州大学末廣研・田上研
  九州産業大学矢作研

九州北部豪雨現状

Present situation of heavy rainfall in Northern Kyushu

野口 雄太　Yuta NOGUCHI
九州大学大学院 人間環境学府 都市共生デザイン専攻 博士後期課程

平成29年の九州北部豪雨から2年余りが経過した。被災地の復興は一部で着々と進められているとは言え、河川改修や宅地造成に着手できていない地区もまだ多く残されている。山を引っ掻いたような土砂崩れの爪痕は雨のたびに地肌を晒し、濃くなった土の色が今もなお目に飛び込んで来る。河川の改良復旧には周辺の区画整理の計画が固まる必要があるが、報道[*1]によれば計画案の確定は2019年の年末以降になる見通しであるという。その工事の完了までにはこれから更に多くの時間を要しそうだ。

一方で、仮設住宅は入居期限となる2年間が既に経過し順次閉鎖が進む。KASEIが支援を展開してきた朝倉市林田仮設も既に解体工事が始まっている。入居者らは県に対し期限の延長を再三要望してきた。しかしながら、県は今回の九州北部豪雨が特定非常災害[*2]に指定されていないことなどを理由に、その延長を認めなかった。「自力で再建した被災者との公平性に配慮する必要がある」[*3]との県知事の発言もある。市の調査では、退去期限が迫る7月時点で、被災した世帯の約9割が既に再建するか再建の目処が立っているという。しかし、その実態はどういうものであったのだろうか。期限が迫るなかで、元の土地に戻るまでの仮のすまいとして近くの賃貸へ移っていく仮設入居者も少なくない。復旧工事が終わるまで戻ることの出来ない長期避難世帯に認定されているにも関わらず、退去を迫られる世帯があるとの話も聞こえる。

仮設住宅は、災害のたびに住居としての質を向上させてきている。今回の仮設住宅も、基礎が木杭という以外は、一般の木造住宅と遜色ないものであっただろう。仮設住宅は最早2年で解体する必要がある仮設建築物とは言い難い。熊本地震や東日本大震災の被災地には今も仮設住宅が残り、被災者の住宅再建までのすまいとしての役割を果たし続けている。復旧事業の都合で恒久的なすまいに戻ることが出来ない世帯があるにも関わらず、他の被災地よりも早く解体される必要があったのだろうか。

仮設の閉鎖とともにKASEIの支援も終わりを迎えることとなった。大学連携の組織として、以上に見てきたような現状から仮設住宅のあり方を再考していく必要がある。一方で、本来あってはならないようにも思えるが、仮設住宅から次の仮のすまいに移った被災者の存在も事実である。可能ならば、KASEIとして彼らに寄り添い続ける方法を考える必要があるのかもしれない。

護岸工事と仮設道路、土砂崩れ後の治山工事も進む

解体される仮設住宅、奥の建物は新たに建設された公営住宅

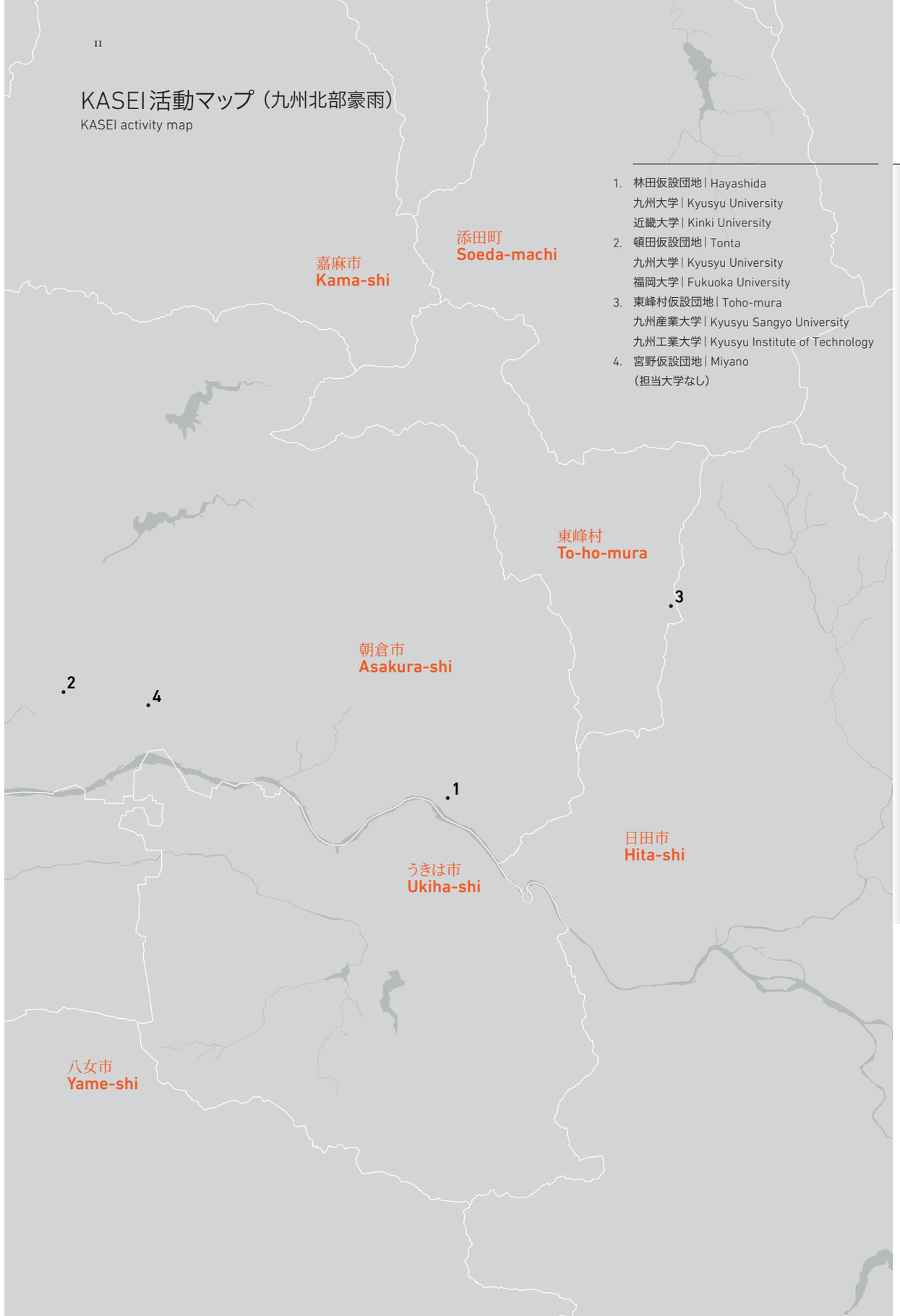
*1　青木絵美、飯田憲：再建とは 九州北部豪雨2年／上、毎日新聞、2019.7.3、西部朝刊、25頁

*2　著しく異常かつ激甚な非常災害として政令に指定されたもの。これに指定された場合、被害者の権利利益の保護を図るための特例が認められる。特に仮設住宅では、建築基準法および景観法に定められた仮設建築物の存続期間（2年間）を1年単位で延長することが可能になる。

*3　大坪拓也：九州豪雨 仮設入居延長せず 公平性配慮 知事表明へ、西日本新聞、2019.7.26、朝刊、1頁

KASEI活動マップ（九州北部豪雨）

KASEI activity map



1. 林田仮設団地 | Hayashida
   九州大学 | Kyusyu University
   近畿大学 | Kinki University
2. 頓田仮設団地 | Tonta
   九州大学 | Kyusyu University
   福岡大学 | Fukuoka University
3. 東峰村仮設団地 | Toho-mura
   九州産業大学 | Kyusyu Sangyo University
   九州工業大学 | Kyusyu Institute of Technology
4. 宮野仮設団地 | Miyano
   （担当大学なし）

朝倉市林田団地

Asakura-shi Hayashida

林田仮設団地では、住民の方の要望に応じて、主に製作物の作成とイベントの手伝いを行いました。

5月は、集会所に雨よけを設置しました。打ち合わせを重ね、研究室で設計から施工までを行いました。大規模な製作物の設置は初めてで、図面通りにいかない部分もありましたが、住民の方の協力もあり、完成させることができました。年度が変わって最初の活動ということで、学生同士、また、住民との交流を深めることができた点も有意義な活動となりました。雨よけは一年経ってもきれいな状態で、大切に使っていただいていることがわかり、嬉しく思いました。

6月には、追悼式で使用する竹灯籠を作成しました。竹の切断、洗浄と2グループに別れ、それぞれ住民の方と一緒に作業を行いました。製作する数が多く、特に竹を切断するのは大変な作業でしたが、その分住民の方々とのチームワークを発揮できました。休憩時間には、全員で卓を囲んでお茶をいただき、現況も含め様々なお話を通して交流を深めることができました。

追悼式は、天候により予定より1ヶ月遅れの8月に行われました。昼にイベントとしてそうめん流し、夜に追悼式ということで、一日住民の方と過ごし交流を行いました。そうめん流しでは、そうめんだけでなく団地内で育ったというトマトもいただきました。他にもピーマンやなすなどの野菜も団地内で育てており、仮設団地のコミュニティにも一役買っているようでした。夜の追悼式には多くの住民の方が参加し、グリーンコープさんから振る舞われた料理や、太鼓、神楽などの演目を楽しんでいました。製作した竹灯籠はとてもきれいで、住民の方からもお褒めの言葉をいただき、大変だった作業もやりがいを感じました。

また、8月には組手什による家具作りワークショップも開催しました。住民の方にお話を伺いながら、ひとつひとつ製作することで、よりそれぞれのニーズにあった家具を製作することができました。過去にKASEIの活動に参加したことがなかった学生も参加してもらいましたが、家具に対する要望がきっかけとなることで住民の方と話しやすくなり、交流を深めることができました。気温が高く、たくさんの住民の方の参加により、予想よりも長丁場となりましたが、楽しく作業をすることができました。

このワークショップは好評をいただき、9月と10月にも同様のものを開催し、多くの住民の方に喜んでいただけました。回を追うごとに私たち自身の技術も向上し、また、バリエーションも豊富になっていきました。参加する学生も徐々に増え、留学生を含む多くの学生が仮設団地で住民の方との交流を行いました。このように少しずつでも災害のボランティア活動に興味を持ってもらうことに意義があると感じます。12月には餅つきに、3月にはお花見に参加するなど、季節のイベントも住民の方と楽しみました。どちらのイベントも大盛況で、とても賑やかで楽しい会となりました。

このように林田団地では様々な活動を行うことができましたが、活動の背景にはみんなの家の管理人である伊藤さんや仮設団地自治体の働きかけがあります。住民の方による自発的な活動に加勢、支援することができよかったと思うと同時に、もし伊藤さんらがいなかったら、と思うと改めて支援の難しさも感じました。

林田仮設団地は、2019年9月に完全に閉鎖しましたが、自立再建が整っていないまま退去になった方もいらっしゃったと伺いました。今後もなんらかのかたちで支援を続けていければと思います。

雨よけ

組手什写真

竹灯籠作り

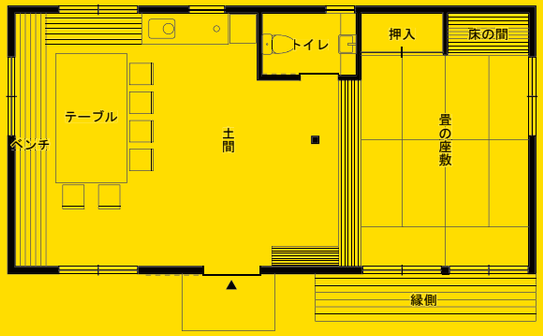
お花見のときの様子

追悼式の準備

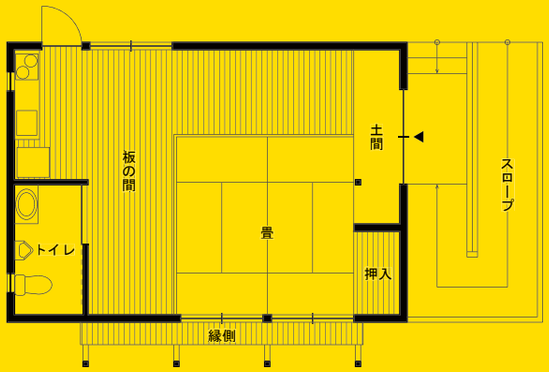
追悼式の様子

みんなの家アーカイブ —360°カメラで見た室内風景—

熊本では20戸以上50戸未満の仮設住宅団地に規格型みんなの家談話室、
50戸以上80戸未満の団地に規格型みんなの家集会所、
80戸以上の団地に本格型みんなの家、
20戸未満の団地にプッシュ型みんなの家がそれぞれ異なるスキームで供給されました。
規格型は仮設住宅建設と同じタイミングで供給され、
本格型・プッシュ型は住民入居後に住民とのワークショップを交えながら設計されました。
このように様々な方法で供給されたみんなの家ですが、
住民の方による使われ方は団地によって異なっています。
そこでみんなの家の室内風景を360°カメラで撮影しました。
そして特徴的な使われ方をしているみんなの家をピックアップしパノラマで解説しています。



規格型みんなの家集会所



規格型みんなの家談話室

規格型みんなの家 談話室

熊本市｜富合町平原団地
住戸数：27｜2018/08/14

熊本市｜富合町南田尻団地
住戸数：28｜2018/08/14

熊本市｜城南町舞原団地
住戸数：87｜2018/08/14

熊本市｜城南町藤山第二団地
住戸数：45｜2018/11/14

宇土市｜境目第一団地
住戸数：24｜2018/08/22

宇土市｜高柳団地
住戸数：24｜2018/08/22

宇城市｜小川団地
住戸数：39｜2018/10/29

宇城市｜井尻団地
住戸数：20｜2018/10/29

阿蘇市｜黒川団地
住戸数：26｜2018/11/14

阿蘇市｜北塚団地
住戸数：30｜2018/11/14

大津町｜室団地
住戸数：33｜2018/09/27

南阿蘇村｜岩坂団地
住戸数：43｜2018/08/11

南阿蘇村｜陽ノ丘団地
住戸数：92｜2018/08/11

西原村｜小森第二団地
住戸数：82｜2018/11/17

西原村｜小森第三団地
住戸数：87｜2018/11/17

西原村｜小森第四団地
住戸数：83｜2018/11/17

御船町｜旧七滝中団地
住戸数：24｜2018/08/08

御船町｜高木団地
住戸数：22｜2018/08/08

御船町｜小坂団地
住戸数：24｜2018/08/08

御船町｜ふれあい広場団地
住戸数：22｜2018/08/08

熊本市｜城南町藤山団地
住戸数：150｜2018/08/14

団地の規模が大きくみんなの家が複数あるため、談話室を社協がオフィスとして利用している。

宇土市｜浦田団地
住戸数：33｜2018/08/14

畳部分には基本的にものを置かず、必要な時にテーブルと座布団を取り出して利用している。

阿蘇市｜三久保団地
住戸数：26｜2018/11/14

団地で行なったイベントなどの写真を飾り付けている。
おばあちゃんが毎日訪れており気軽に立ち寄れる場となっている。

菊陽町｜光の森団地
住戸数：20｜2018/08/11

畳の上にテーブルと椅子を置き、洋室のように利用している。

規格型みんなの家 談話室

御船町｜今城団地
住戸数：33｜2018/08/08

御船町｜滝川団地
住戸数：21｜2018/08/08

御船町｜ふれあい広場第二団地
住戸数：20｜2018/08/08

御船町｜下高野第二団地
住戸数：22｜2018/10/09

御船町｜落合団地
住戸数：42｜2018/08/08

御船町｜西住環団地
住戸数：21｜2018/08/08

嘉島町｜児童公園団地
住戸数：23｜2018/10/17

嘉島町｜上仲間団地
住戸数：20｜2018/11/17

益城町｜赤井団地
住戸数：35｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 C 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 C 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 D 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 E 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜小池島田団地
住戸数：82｜2018/09/128

益城町｜木山団地
住戸数：220｜2018/10/05

益城町｜平田団地
住戸数：48｜2018/09/29

益城町｜櫛島団地
住戸数：41｜2018/09/29

益城町｜安永東団地
住戸数：43｜2018/07/25

甲佐町｜乙女第一団地
住戸数：48｜2018/07/25

甲佐町｜乙女第三団地
住戸数：31｜2018/07/25

嘉島町｜下仲間団地
住戸数：21｜2018/11/17

カーテンが閉じられ、外から中の様子が見えなくなっている。
内部も閑散としている印象を受ける。

益城町｜飯野小団地
住戸数：48｜2018/08/11

壁一面に飾り付けられた模造紙が貼られており、内部の印象が他の団地と大きく異なる。

甲佐町｜白旗団地
住戸数：90｜2018/07/25

マッサージチェアが置いてあり、テレビはないがお年寄りの方が気軽に集まる場となっている。

甲佐町｜乙女第二団地
住戸数：26｜2018/07/25

毎週体操をしている方がテーブルを囲んでスイカを食べており、撮影後にいただいた。

規格型みんなの家 集会所

熊本市｜城南町塚原団地
住戸数：96｜2018/08/14

熊本市｜秋津中央公園団地
住戸数：54｜2018/08/14

熊本市｜城南町藤山団地 1
住戸数：150｜2018/08/14

熊本市｜城南町舞原団地
住戸数：87｜2018/08/22

南阿蘇村｜長陽運動公園団地
住戸数：56｜2018/07/30

南阿蘇村｜南出口団地
住戸数：57｜2018/08/09

南阿蘇村｜加勢ノ上団地
住戸数：65｜2018/07/30

南阿蘇村｜下野山田団地
住戸数：68｜2018/07/30

西原村｜小森第一団地
住戸数：50｜2018/11/17

御船町｜南木倉団地
住戸数：55｜2018/08/08

益城町｜津森団地
住戸数：73｜2018/09/29

益城町｜広崎団地
住戸数：53｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 A 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 B 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 C 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 D 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 E 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜テクノ団地 F 工区
住戸数：516｜2018/09/29

益城町｜木山団地 2
住戸数：220｜2018/10/05

益城町｜馬水団地
住戸数：77｜2018/09/29

熊本市｜城南町藤山団地 2
住戸数：150｜2018/11/14

板間部分の作り付けの椅子は、物置として利用している。

宇城市｜当尾団地
住戸数：74｜2018/10/29

板間部分には机と椅子を、畳部分には座卓と座布団を配置し、
空間を二つに二分して利用している。

益城町｜安永団地
住戸数：70｜2018/09/29

板間部分だけでなく、畳部屋にも机と椅子を置いている。
老若男女が利用する集会所になっている。

益城町｜木山団地 1
住戸数：220｜2018/10/05

板間部分に大テーブルを置き、それを本棚として利用している。

規格型みんなの家　集会所

益城町｜馬水東道団地
住戸数：56｜2018/09/29

益城町｜馬水西原団地
住戸数：54｜2018/09/29

益城町｜惣領団地
住戸数：63｜2018/09/29

益城町｜木山上辻団地
住戸数：64｜2018/10/05

本格型みんなの家

南阿蘇村｜陽ノ丘団地
住戸数：92｜2018/07/29

西原村｜小森第三団地
住戸数：87｜2018/11/17

西原村｜小森第四団地
住戸数：83｜2018/11/17

益城町｜テクノ団地
住戸数：220｜2018/09/29

益城町｜小池島田団地
住戸数：82｜2018/09/28

益城町｜木山団地
住戸数：220｜2018/10/05

西原村｜小森第二団地
住戸数：82｜2018/11/17

全面ガラス張りの小森第二団地本格型みんなの家は、
こどもが主に使用しており、団地のみんなの家はそれぞれ使い分けがなされている。

甲佐町｜白旗団地
住戸数：90｜2018/07/25

滑り台や黒板、飾り付けなど子供も楽しめるようなみんなの家になっており、多くの人が利用する。

プッシュ型みんなの家

熊本市｜城南町さんさん二丁目団地
住戸数：16｜2018/08/13

宇土市｜新松原団地
住戸数：18｜2018/08/22

宇土市｜境目第三団地
住戸数：12｜2018/08/22

宇土市｜境目第二団地
住戸数：14｜2018/08/22

宇城市｜御領団地
住戸数：10｜2018/10/29

宇城市｜曲野長谷川団地
住戸数：13｜2018/10/29

美里町｜くすのき平団地
住戸数：15｜2018/07/25

南阿蘇村｜室第二団地
住戸数：13｜2018/08/08

御船町｜甘木団地
住戸数：8｜2018/08/08

阿蘇市｜内牧団地
住戸数：19｜2018/11/29

土間空間があり、住民が入りやすく、座りやすいつくりになっている。
常時解放されているわけではないが、よく利用されている。

御船町｜玉虫団地
住戸数：16｜2018/08/08

屋外空間や軒下空間など様々な居場所がつくられており、
鍵の開閉に関わらず集まることができるが、あまり利用はされていなかった。

団地ドローイング

熊本での仮設住宅団地供給の際には熊本型Ｄと呼ばれる熊本独自の計画が実施され、
従来の仮設住宅団地に比べ、
ゆとりある配置計画や共用空間が計画されました。
支援活動を行なっていく中で、
私たちは住民の方による団地の多様な使いこなしをよく目にしました。
この活動はそれぞれの団地を担当している研究室が
今までの活動で目にしてきた生活場としての団地をドローイングし記録に残す活動です。

大津町
室第二仮設団地

Minamiaso-mura muro, dai-2

戸数
13戸

入居形式
-

入居開始日
2016/8/26

みんなの家の種類
プッシュ型１棟

作図担当
九州工業大学徳田研究室
福岡大学四ヶ所研究室

宇土市
境目第2団地

Uto-shi Sakaime,dai-2

戸数
14戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/11/02

みんなの家の種類
プッシュ型1棟

作図担当
鹿児島大学柴田研究室

宇土市
境目第3団地

Uto-shi Sakaime,dai-3

戸数
12戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/10/18

みんなの家の種類
プッシュ型1棟

作図担当
鹿児島大学柴田研究室

御船町
東小坂団地

Mifune-machi Higashi Ozaka

戸数
10戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/09/01

みんなの家の種類
コミュニティスペース

作図担当
熊本大学田中研究室

御船町
甘木団地

Mifune-machi Amagi

戸数
8戸

入居形式
集落単位入居
（高齢者優先）

入居開始日
2016/09/06

みんなの家の種類
プッシュ型１棟

作図担当
大阪市立大学宮本研究室
横山研究室

熊本市
さんさん2丁目団地

Kumamoto-shi
Jonan-machi sansan 2chome

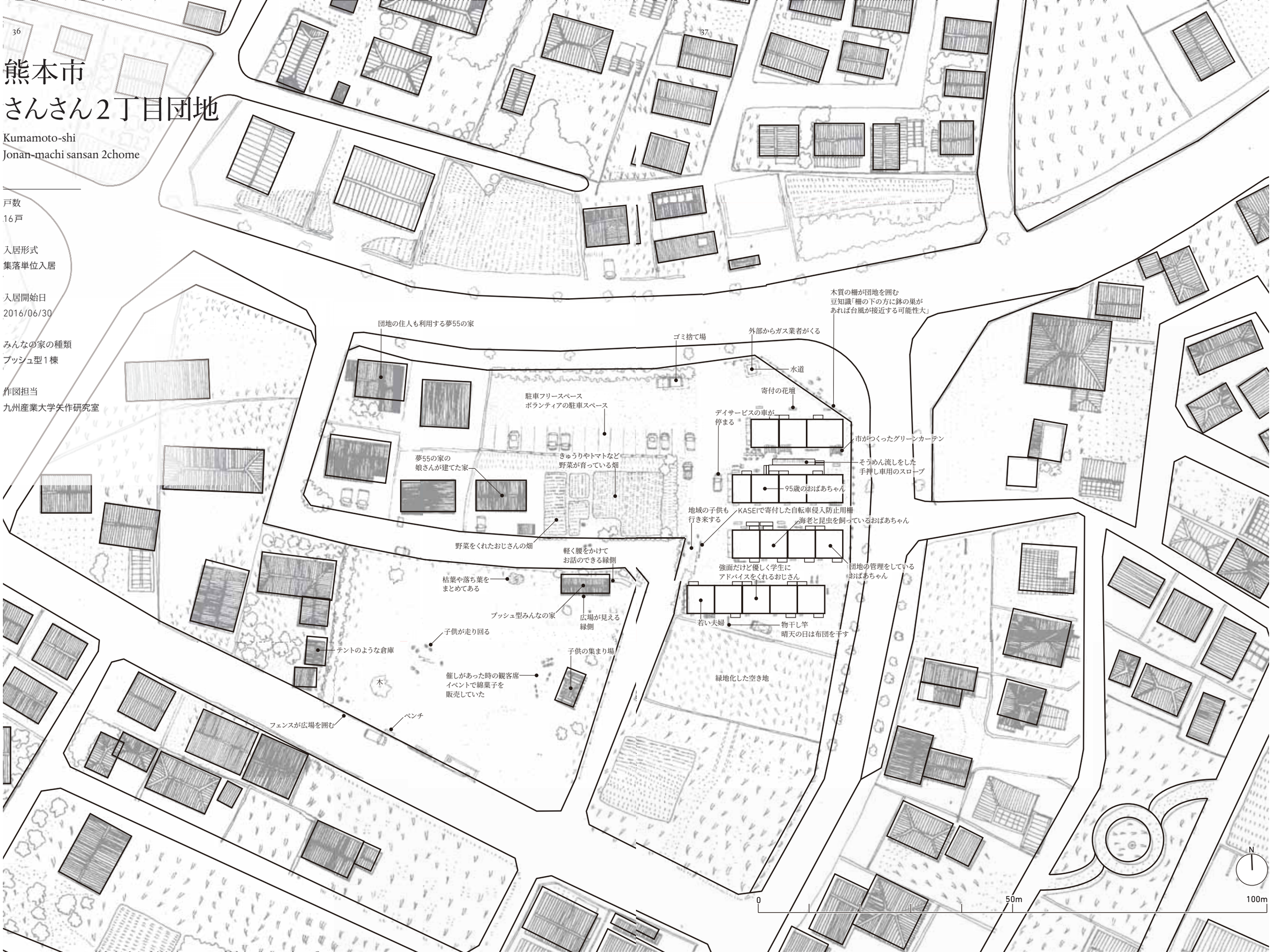
戸数
16戸

入居形式
集落単位入居

入居開始日
2016/06/30

みんなの家の種類
プッシュ型1棟

作図担当
九州産業大学矢作研究室



甲佐町
乙女第2団地

Kosa-machi Otome,dai-2

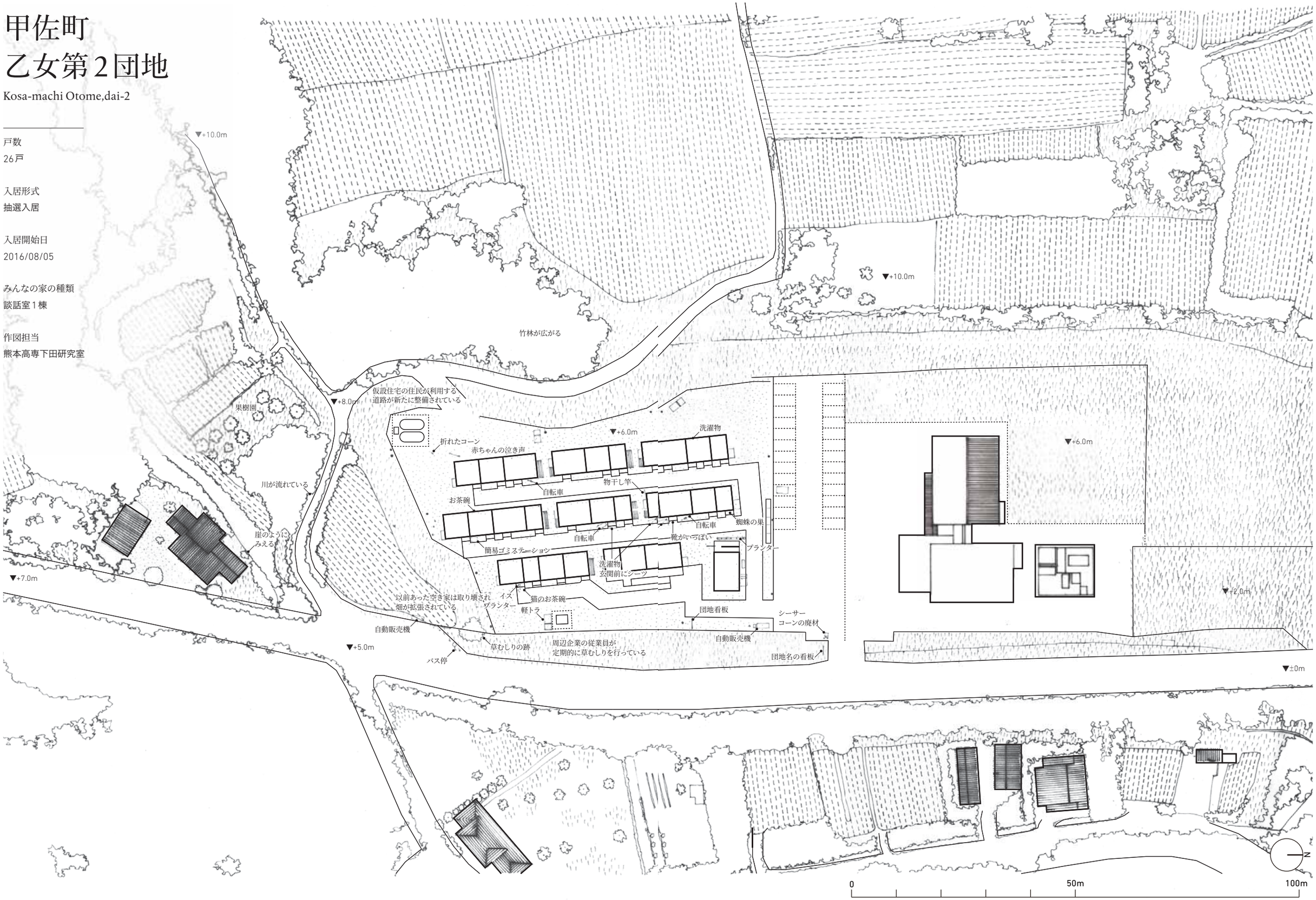
戸数
26戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/08/05

みんなの家の種類
談話室1棟

作図担当
熊本高専下田研究室



益城町
木山団地

Mashiki-machi Kiyama

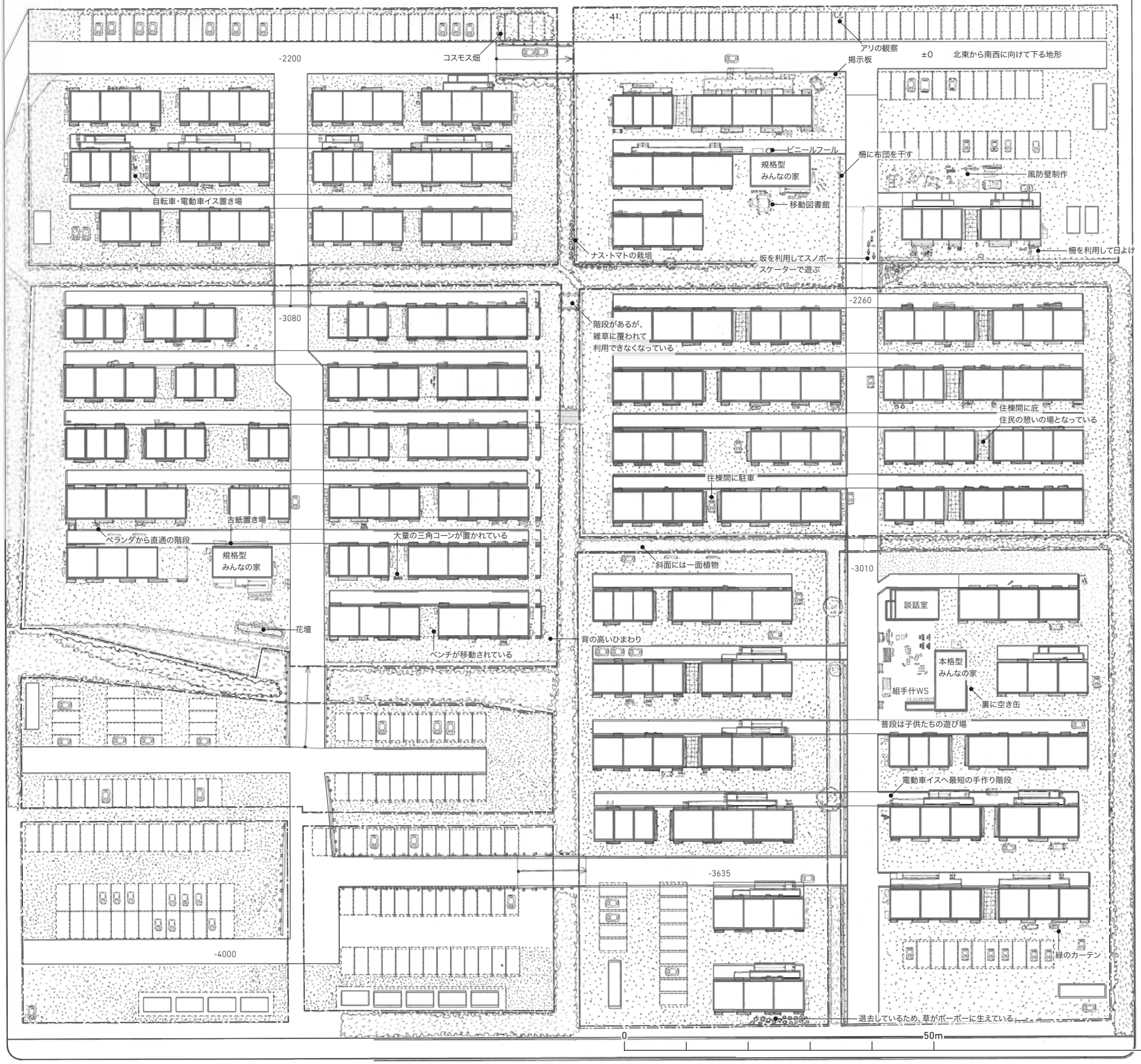
戸数
220戸

入居形式
完全抽選入居

入居開始日
2016/8/9

みんなの家の種類
談話室1棟
集会所2棟
本格型1棟

作図担当
山口大学内田研究室



益城町
テクノ団地

Mashiki-machi Tekuno

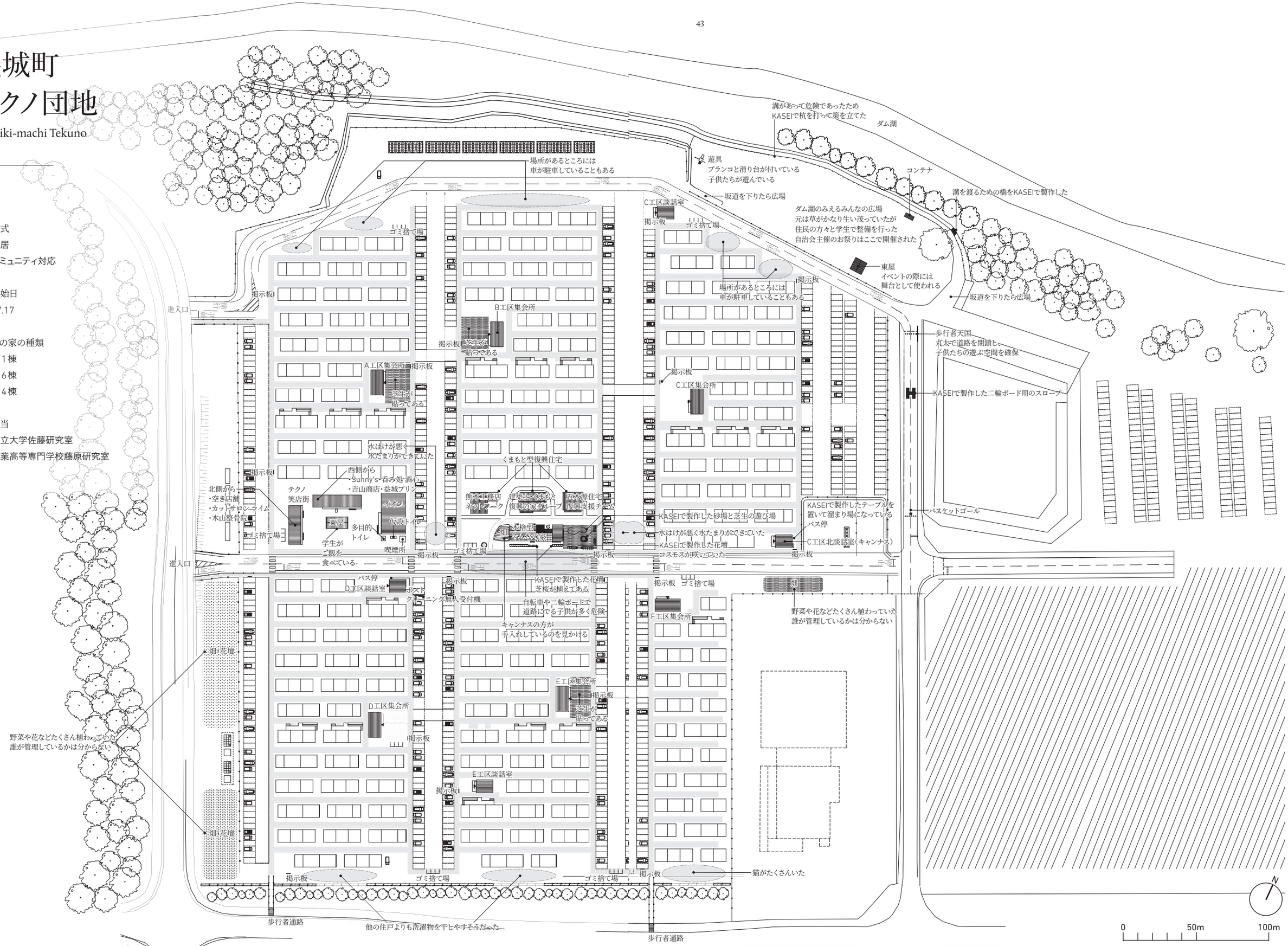
戸数
516戸

入居形式
抽選入居
一部コミュニティ対応

入居開始日
2016.7.17

みんなの家の種類
本格型１棟
集会所６棟
談話室４棟

作図担当
熊本県立大学佐藤研究室
有明工業高等専門学校藤原研究室



益城町
小池島田団地

Mashiki-machi Oikeshimada

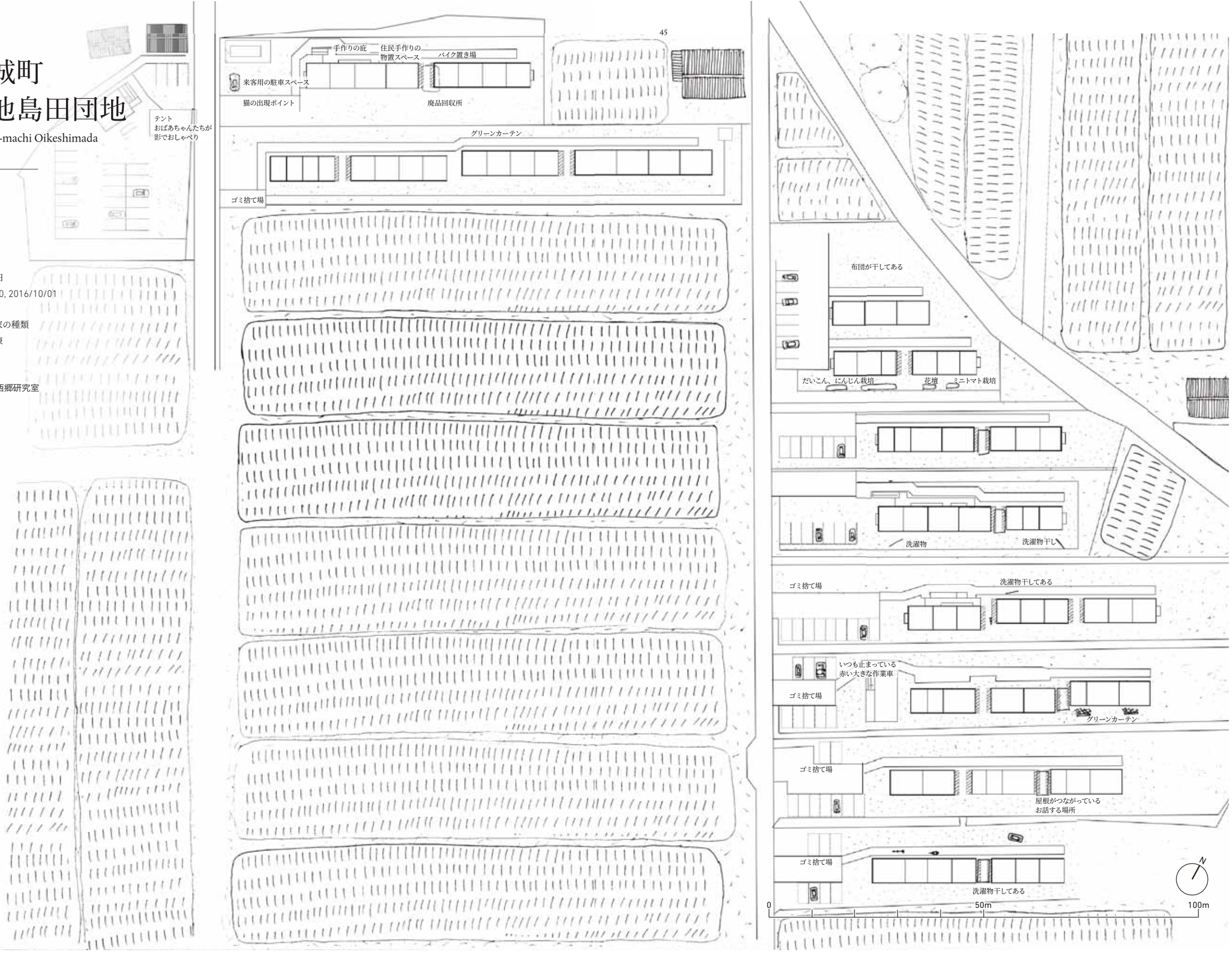
戸数
82戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/8/10, 2016/10/01

みんなの家の種類
本格型２棟

作図担当
崇城大学西郷研究室



甲佐町 白旗団地

Kosa-machi Shirahata

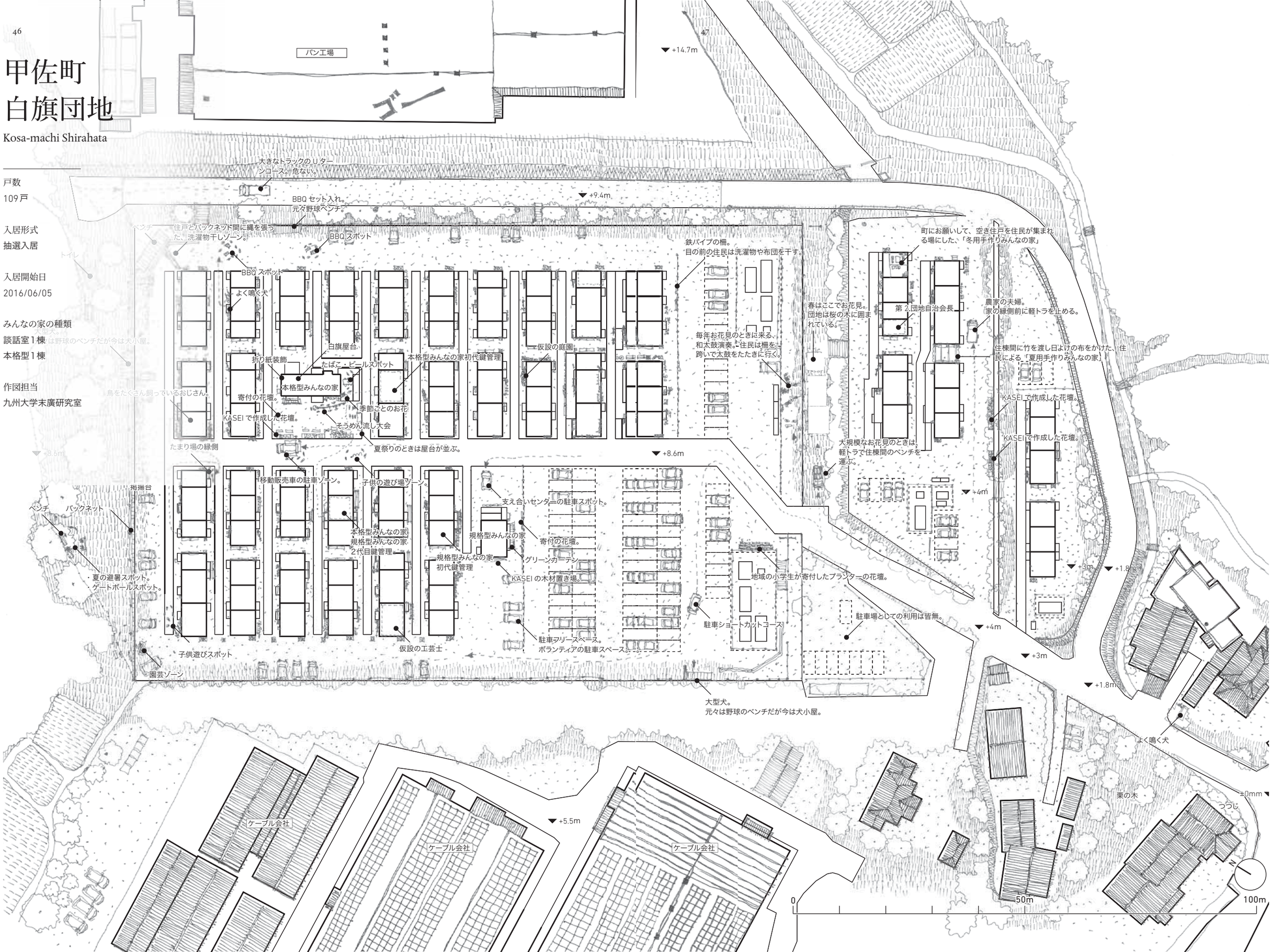
戸数
109戸

入居形式
抽選入居

入居開始日
2016/06/05

みんなの家の種類
談話室1棟
本格型1棟

作図担当
九州大学末廣研究室



西原村
小森団地

Nishihara-mura Komori

戸数

292戸

入居形式

コミュニティ対応

入居開始日

2016/6/16

みんなの家の種類

本格型3棟

集会所1棟

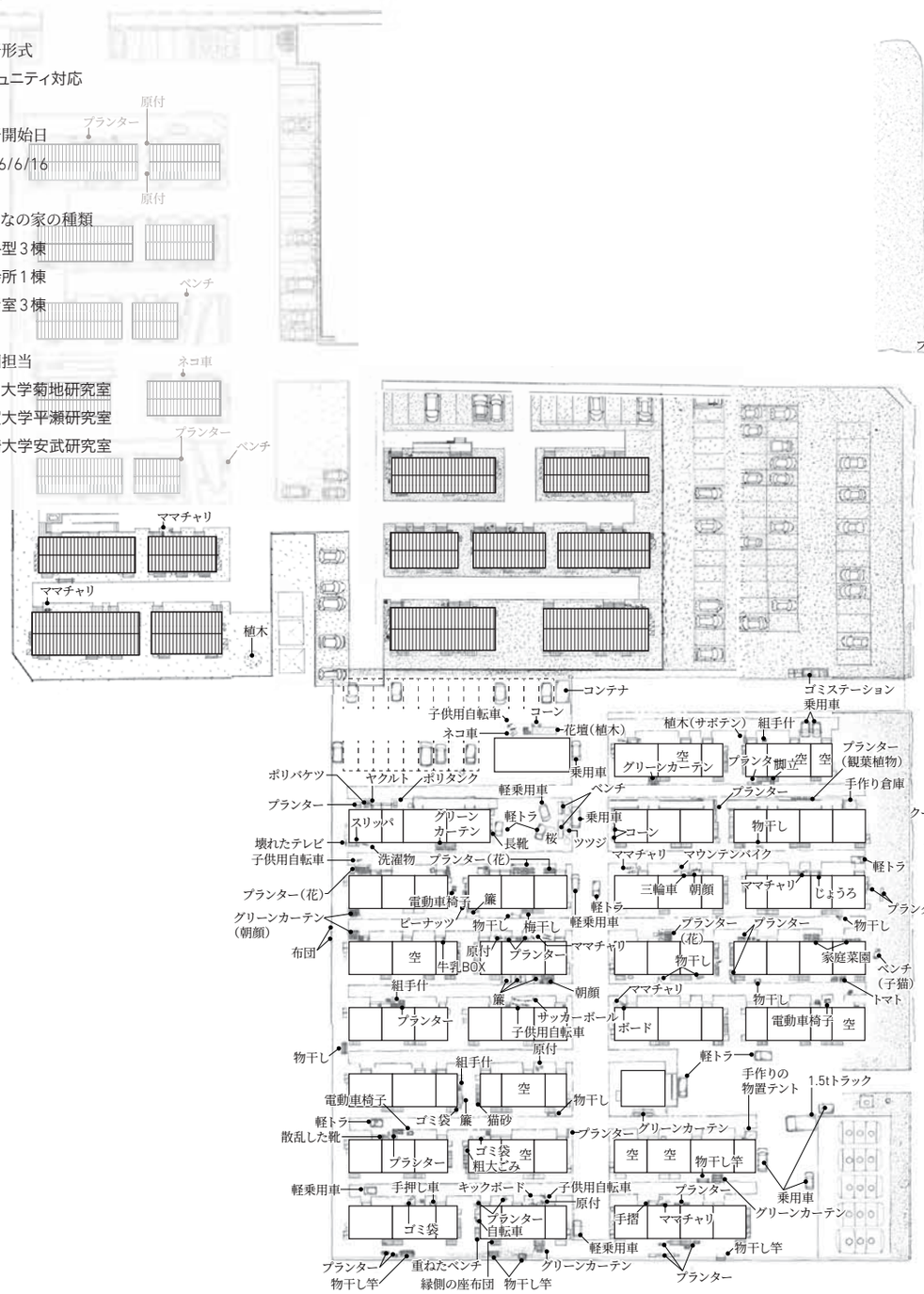
談話室3棟

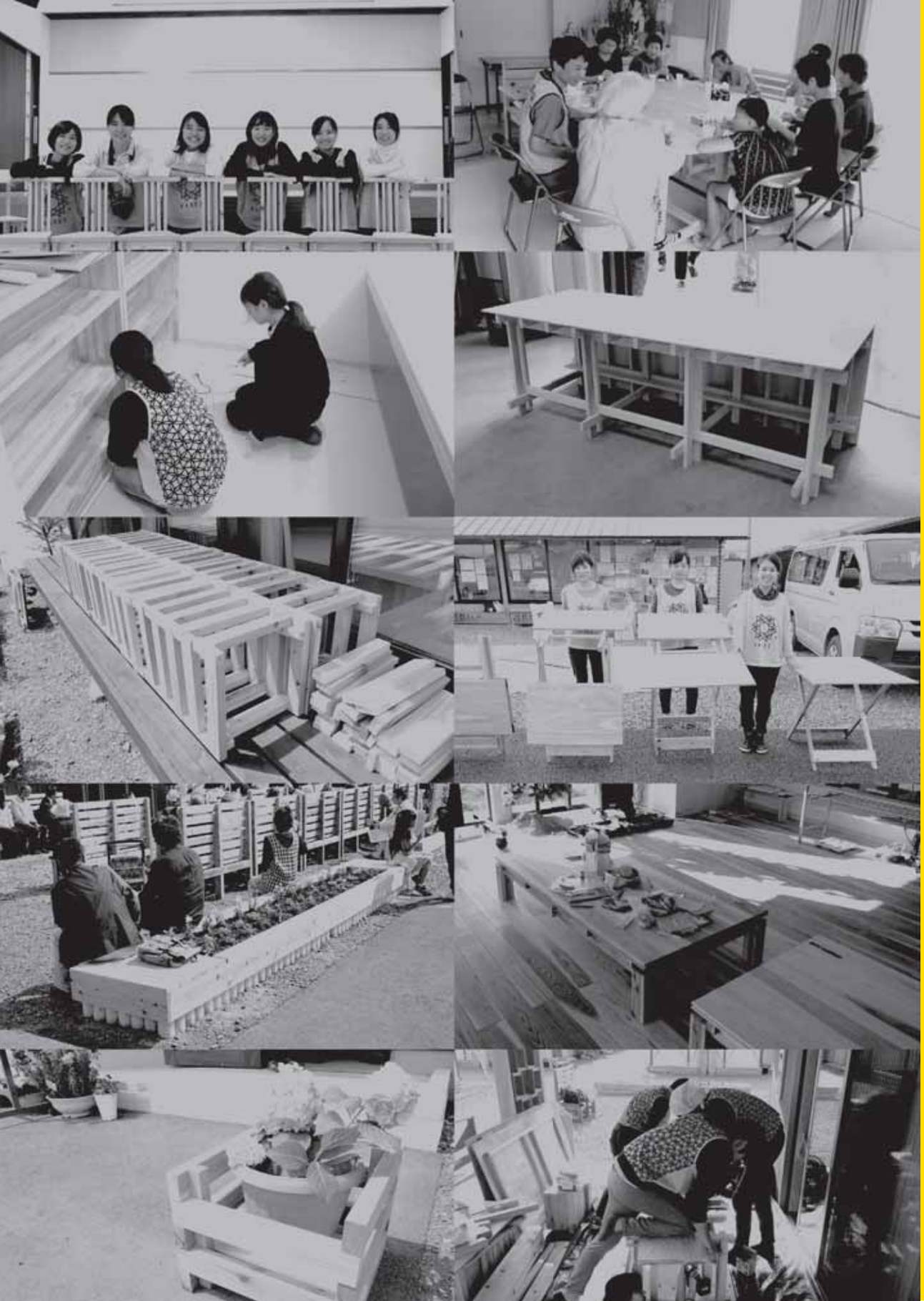
作図担当

九州大学菊地研究室

佐賀大学平瀬研究室

長崎大学安武研究室



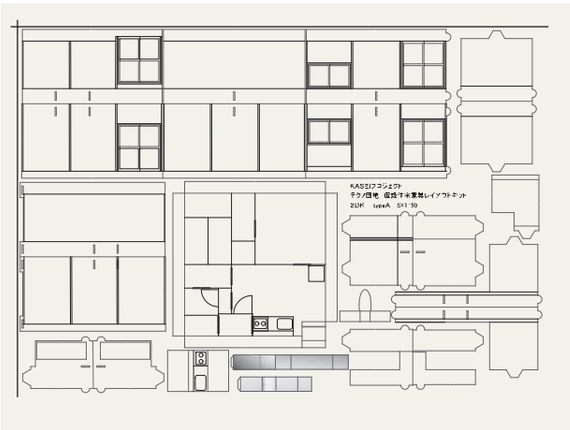


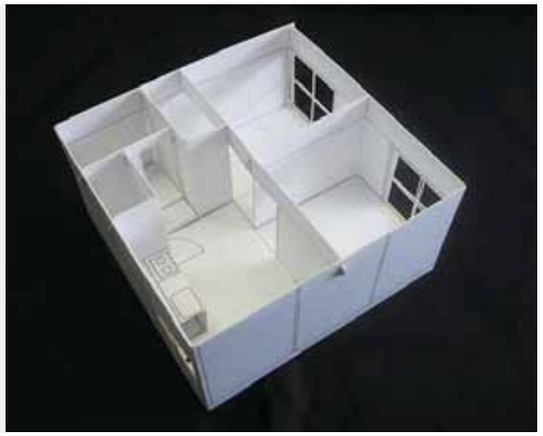
KASEI制作物図鑑

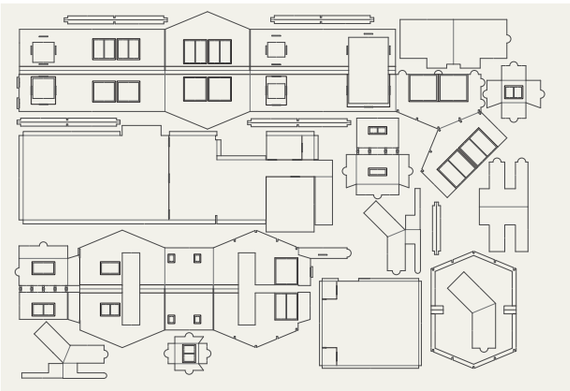
KASEIプロジェクトはものづくり・ことづくり両面からの支援がコンセプトです。
そのコンセプトのもと住民の方々とコミュニケーションを取りながら持続した支援活動を進めていきました。
そしてものづくりにおいては建築学生という特徴を生かし、
テーブル、椅子、棚などの家具作りから建物の増築まで様々なスケールで設計・制作を行なっていきました。
そして今までKASEIが作ってきた制作物を図鑑としてまとめました。

益城町テクノ団地

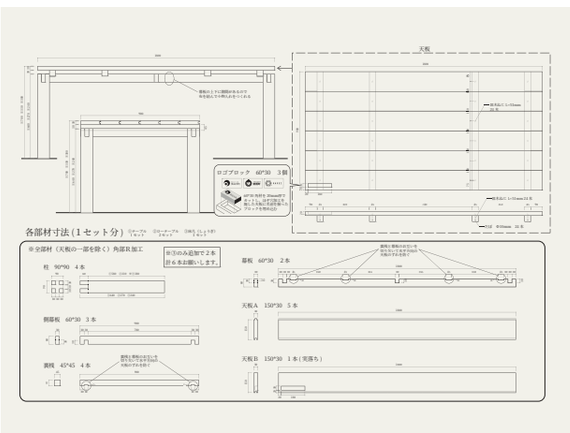
2016.10　仮設住宅ペーパーキット
熊本県立大学・有明高専



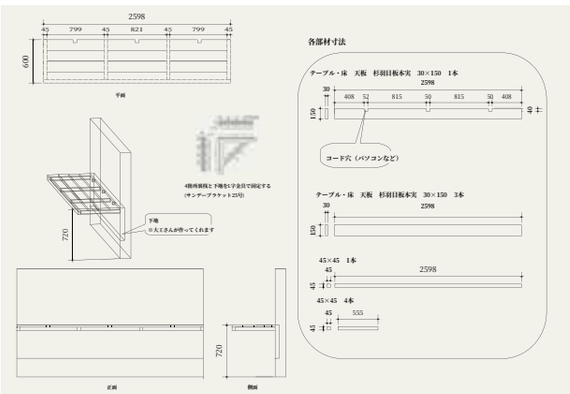




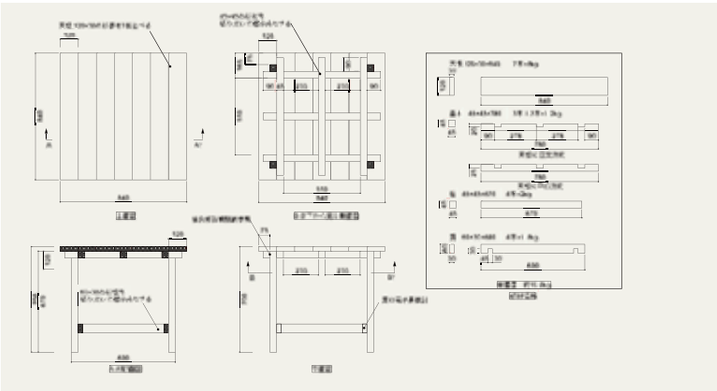
2016.11　みんなの家 テーブル
熊本県立大学・有明高専



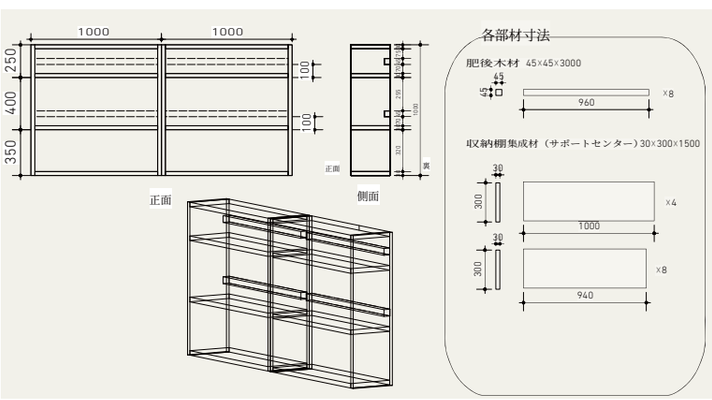
2016.11　サポートセンター カウンター
熊本県立大学・有明高専



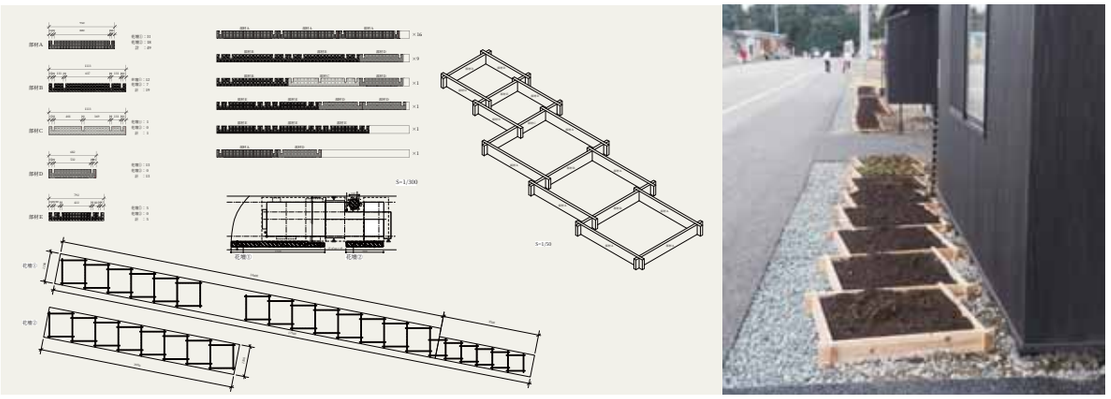
2016.11　サポートセンター 机
熊本県立大学・有明高専



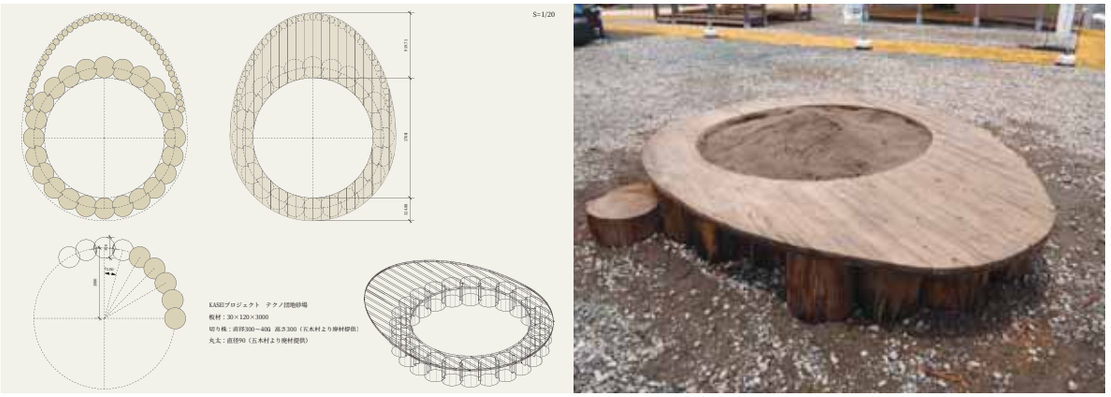
2016.11　サポートセンター 棚
熊本県立大学・有明高専



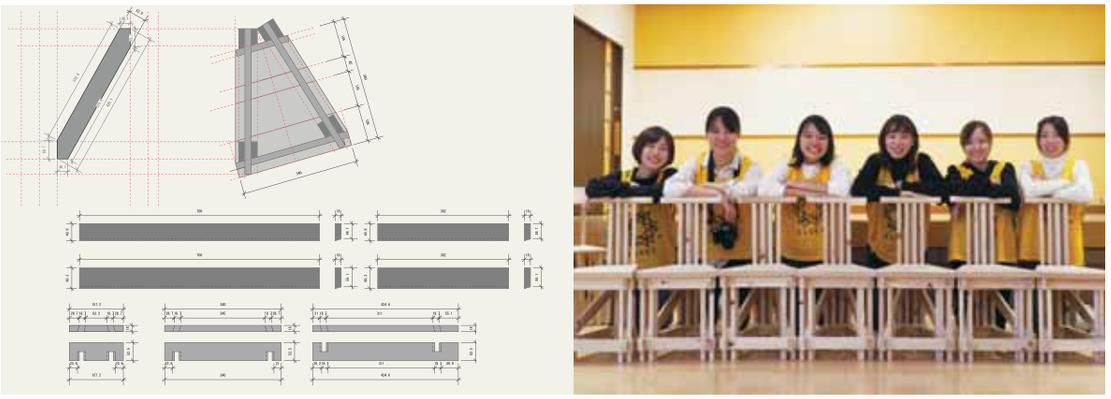
2016.12 | 花壇
熊本県立大学



2017.05 | 砂場
熊本県立大学

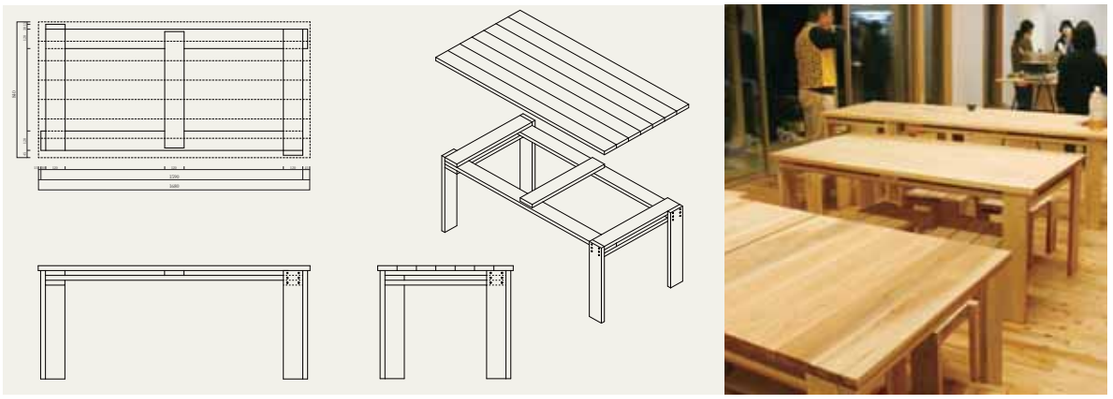


2018.10 | 椅子
熊本県立大学

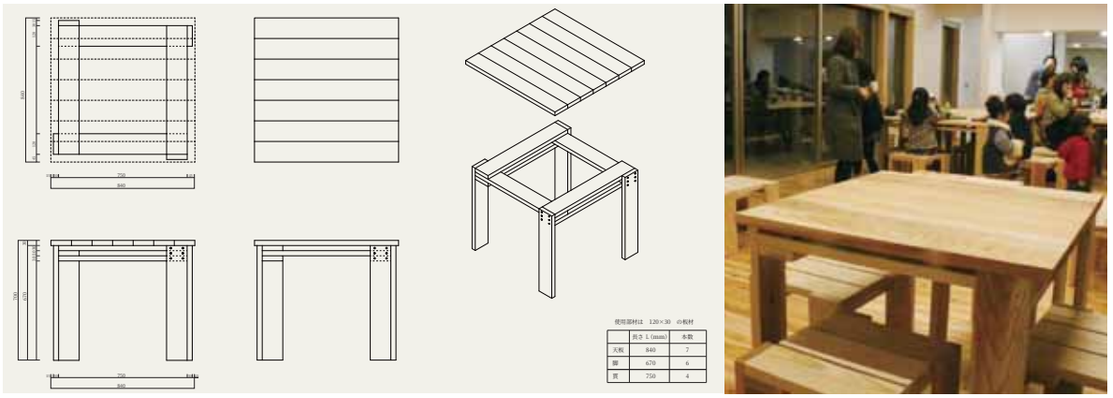


益城町木山団地

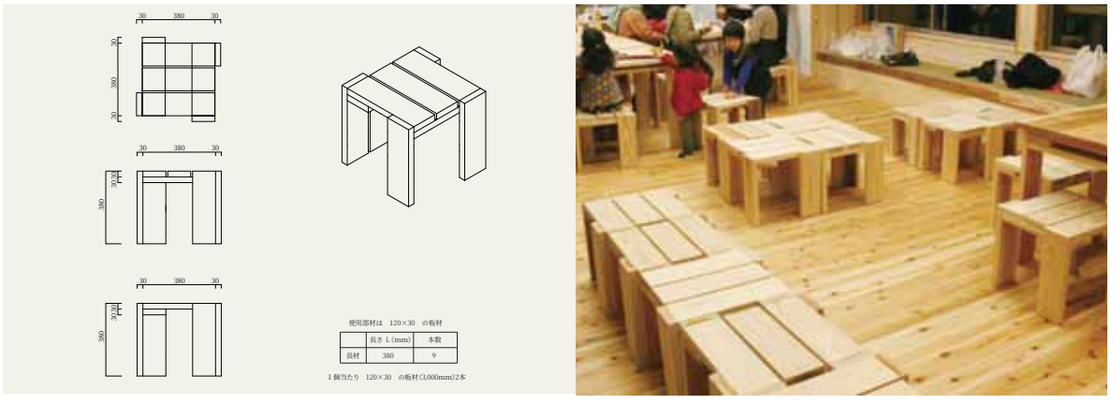
2016.12 | みんなの家 テーブル大
山口大学内田研究室



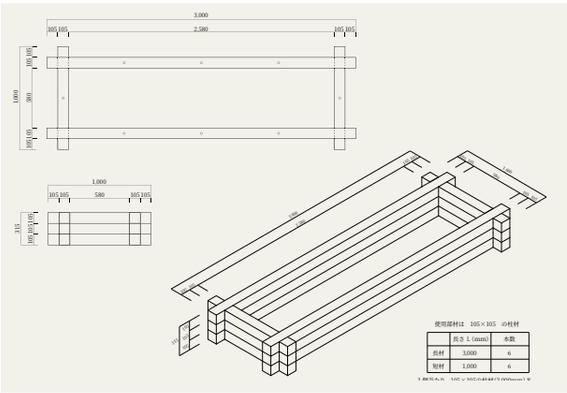
2016.12 | みんなの家 テーブル小
山口大学内田研究室



2016.12 | 椅子
山口大学内田研究室



2016.12 | 花壇
山口大学内田研究室



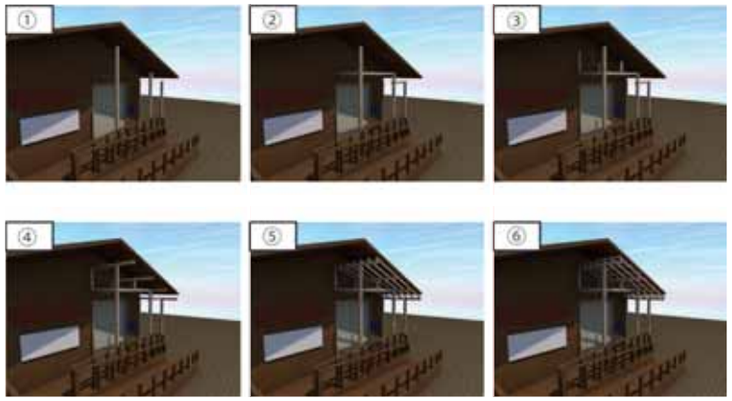
2017.09 | 仮設住宅 防風壁
山口大学内田研究室

益城町小池島田団地

2017.05 | ハンガー掛け
崇城大学西郷研究室

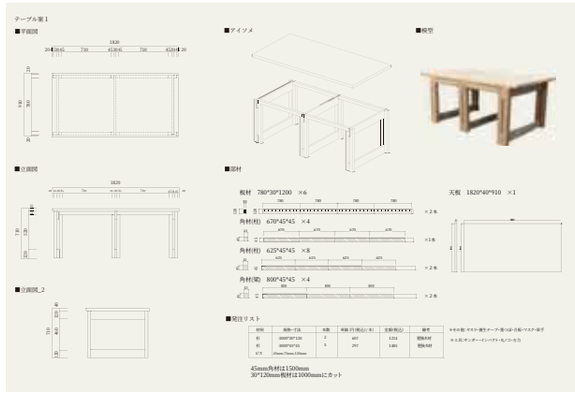
2017.08 | みんなの家 テーブル
崇城大学西郷研究室

2019.05 | みんなの家 雨よけ
崇城大学西郷研究室



南阿蘇村陽の丘団地

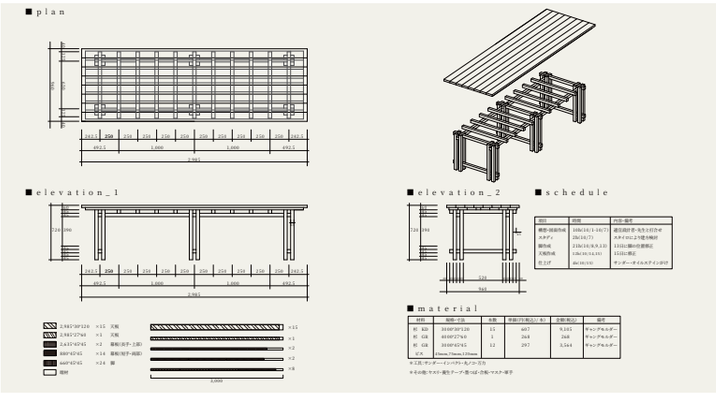
2016.10 | みんなの家 テーブル
福岡大学四ヶ所研究室・九州工業大学徳田研究室



甲佐町白旗団地

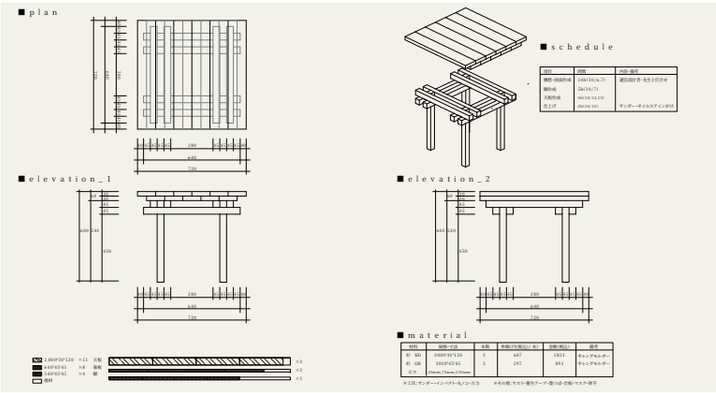
2016.10 | みんなの家 テーブル大

九州大学末廣研究室



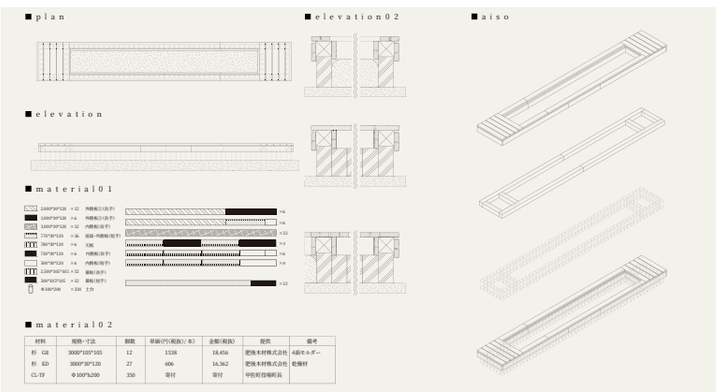
2016.10 | 花壇

九州大学末廣研究室



2016.10 | 花壇

九州大学末廣研究室

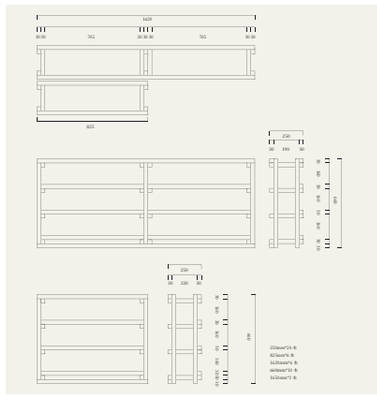


2016.11 | みんなの家デッキ 椅子・テーブル

九州大学末廣研究室

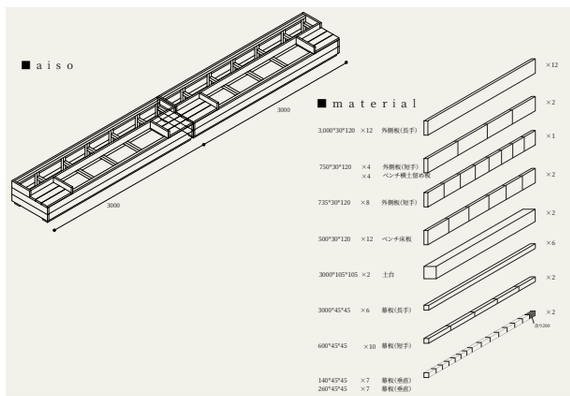
2017.05 | みんなの家 棚

九州大学末廣研究室



2017.07 | 花壇

九州大学末廣研究室



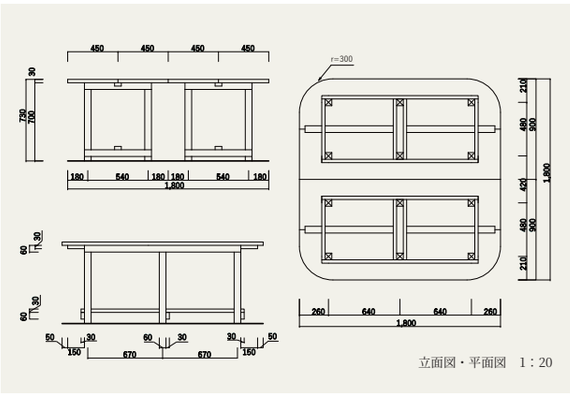
2017.09 | 折り畳み机

九州大学末廣研究室

甲佐町乙女第2団地

2016.10 | みんなの家 テーブル

熊本高専下田研究室



宇城市当尾団地

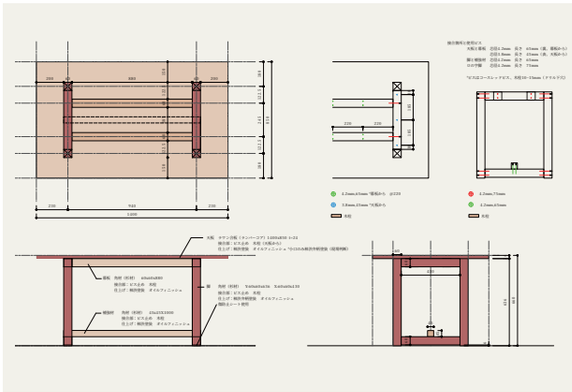
2017.04 | プランターケース

鹿児島大学鷹野研究室

南阿蘇村室第2団地

2018.3 | みんなの家 テーブル

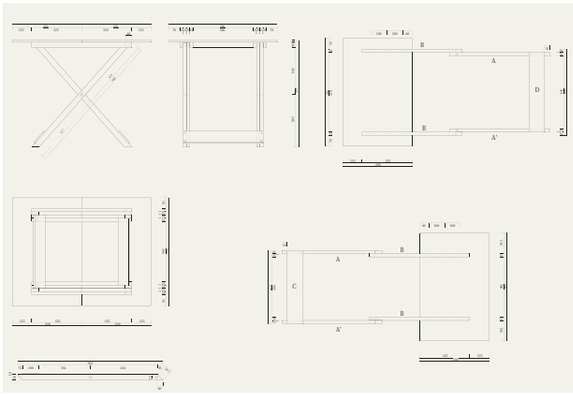
福岡大学四ヶ所研究室・九州工業大学徳田研究室



朝倉市林田団地

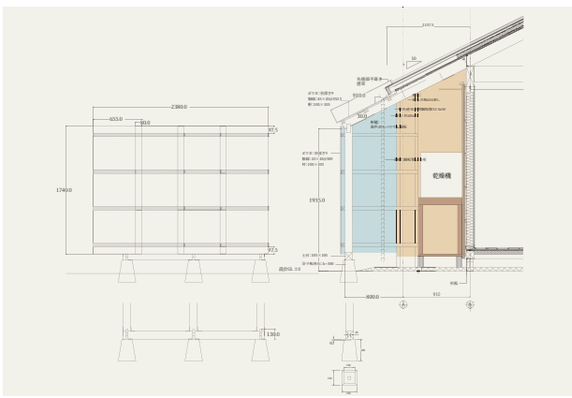
2018.04 | 屋外テーブル

九州大学末廣研究室・菊地研究室



2018.05 | 集会所下屋

九州大学末廣研究室・菊地研究室・田上研究室、福岡大学四ヶ所研究室



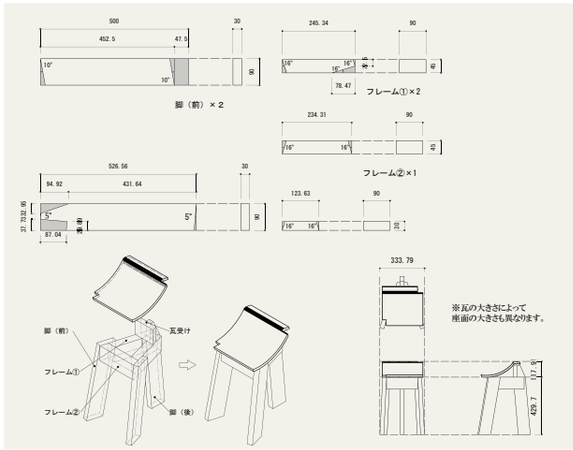
甲佐町災害公営住宅 甲佐団地

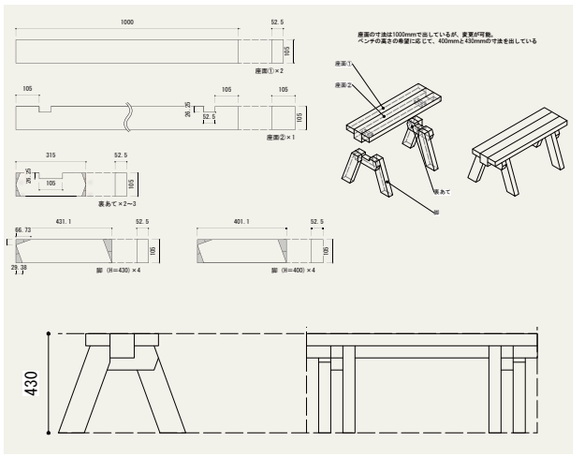
2018.08 | みんなの家 家具

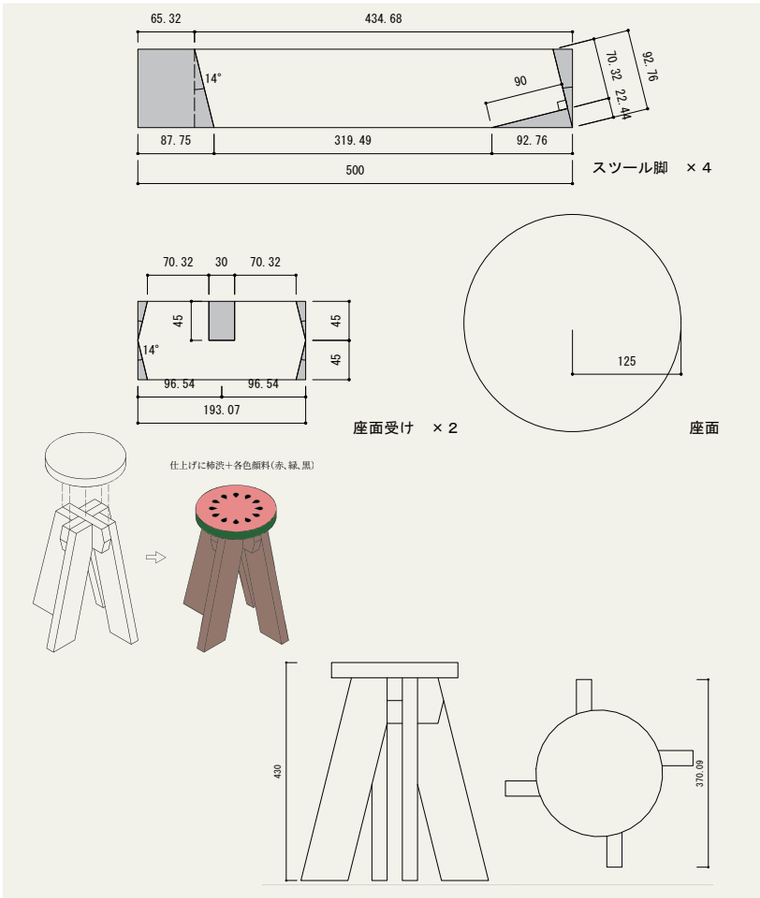
九州大学末廣研究室

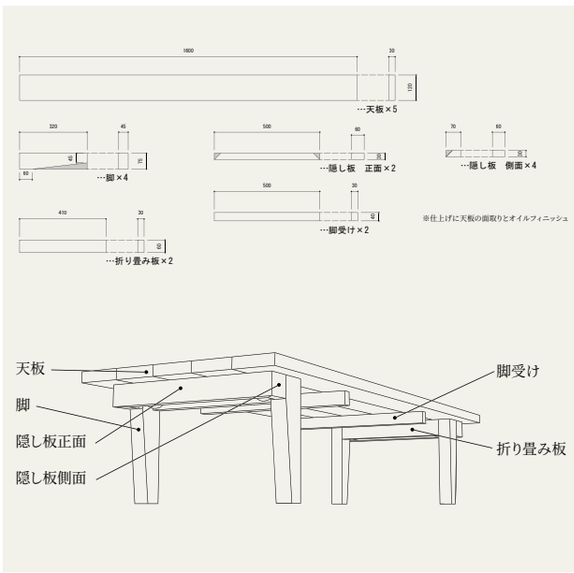
2018.08 | みんなの家 家具

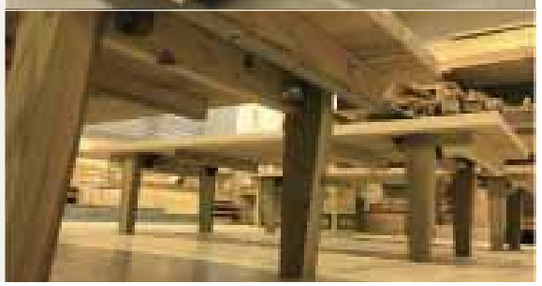
熊本県立大学佐藤研究室・芝浦工業大学１年生











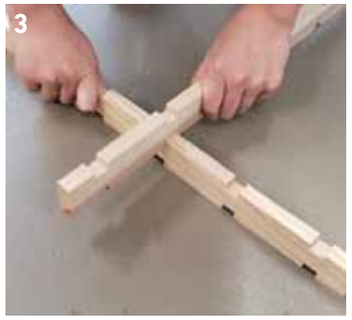
組手什ワークショップ

KASEIのものづくりの一環として組手什による家具作成があります。組手什は誰でも簡単に組み立てられるため住民の方と一緒にものづくりが行えます。仮設住宅では収納などの家具が不足しているため住民の方からの要望も多く、多くの団地で組手什を使った活動を行いました。

スキーム

作りたいサイズを考えて、材をカットする位置に墨入れをしていきます。

墨入れした線にそって材をカットします。



凹み同士を組んでいきます。

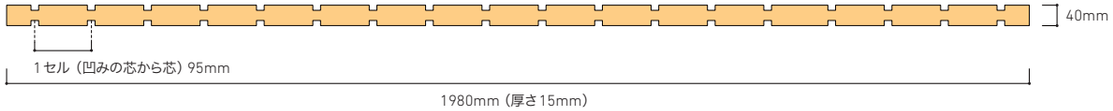
手で組むのが難しい時はハンマーなどで打ち込みます。

3、**4**の作業を繰り返します。

完成!!

活動風景

組手什の規格



制作物

棚
43本 | 横:20セル 縦:6セル 奥:9層

棚
41本 | 横:12セル 縦:8セル 奥:9層

棚
28本 | 横:11セル 縦:10セル 奥:8層

靴箱
23本 | 横:9セル 縦:12セル 奥:7層

棚
21本 | 横:9セル 縦:10セル 奥:8層

棚
18本 | 横:9セル 縦:9セル 奥:8層

靴箱
17本 | 横:8セル 縦:10セル 奥:5層

椅子
15本 | 横:13層 縦:8セル 奥:4セル

靴箱
15本 | 横:6セル 縦:8セル 奥:7層

棚
13本 | 横:4セル 縦:7セル 奥:9層

棚
12本 | 横:5セル 縦:9セル 奥:6層

靴箱
12本 | 横:5セル 縦:9セル 奥:6層

棚
11本 | 横:6セル 縦:7セル 奥:6層

靴箱
11本 | 横:7セル 縦:6セル 奥:5層

椅子
9本 | 横:4セル 縦:6セル 奥:7層

椅子
9本 | 横:4セル 縦:6セル 奥:8層

棚
7本 | 横:5セル 縦:2セル 奥:7層

テレビ台
7本 | 横:6セル 縦:4セル 奥:5層

テレビ台
6本 | 横:6セル 縦:3セル 奥:5層

棚
5本 | 横:4セル 縦:2セル 奥:6層

第12回KASEI実行委員会 気づきワークショップ

KASEIプロジェクトの中締めとなった第12回実行委員会で、3年間のKASEIの活動を通して気づいたことや良かった点・改善すべき点を現役メンバーやOBメンバーを交えて意見を出し合った。

1 KASEIの支援内容

キーワード

ボランティア競合｜メディアと**KASEI**｜研究室と**KASEI**｜住民と**KASEI**｜インナーブランディング

野口:私たちのグループはKASEIについての話です。
まず僕らは団地担当制という一つの研究室が一つの団地に向き合って支援していくっていう方法によって効果的な支援をしていこうしていったわけですけれども、それによって団地の住民の人々と関係性ができて、例えば住民の方からお茶会あるから寄って行ってと言われて実際に行ってみたらそれは他のボランティアの企画だったと。そしてその企画に相乗りしちゃって、終わった後に君たち誰なのみたいに言われて。住民さんとの距離が近いあまりに他のボランティア団体と揉めちゃうっていう話がありました。

次に長い時間住民の皆さんと付き合っていることでよかったのは何かって言うと、1年目は僕らはピュアに支援活動をやって言って住民さんとものづくり・ことづくりをやっていたわけなんですけど、2年目からはそれも落ち着いていって、例えばKASEI全体の調査も行ったし各研究室の調査っていうのもやりました。既に住民さんとの関係性が出来てるから調査の依頼をするとしょうがないねって言って受け入れてもらうところを目にしました。門前払いされるような他団体の調査者がいる中で僕らには腹を割って話してくれるって言うのはすごい良かったことです。

ただそこの住民さんとはすごく親しくなったと言っても、実際KASEIの知名度はどうだったんだっていう話はあります。メディアに対してKASEIって言っても伝わらないので例えば熊本の大学生であったり九州の学生たちが、ということで載ることはあってもKASEIっていう言葉で載ることはあまりなくて。僕らはメディアを呼んで何か活動するって言うことはやっていなくて外に対するKASEIというものはなかなか発信できなかったということが課題であったと思います。一方で一年目の子達も言ってたんですけど、内側に対しても同じで、KASEIって何をする団体なんだろうっていうのがわからないまま研究室に入っているっていう人も少なからずいて、研究室内であったり大学内でインナーブランディングがうまくいっていなかったのではないかっていう話がありました。KASEIを発信していくということに関してはいままでの活動を通してもそうですし現状の課題でもあるのかなと思います。

［質疑応答］

福田:インナーブランディングと外に対するブランディングができていなかったていうことに共感します。自分たちの支援活動に必死になるがあまりそこを怠っていました。Facebookとかホームページを最初に作ったのは良かったけど、それをさらに改善・発展させていくということに関してはあまりできなかったのかなと思います。だから例えば広報部隊であったり活動をメディアに拡散させるようなメンバーがいないとなかなかそういうことって難しいと思います。

2 住戸と配置

キーワード

熊本型**D**｜動線利用｜小路｜住棟間空間｜余白空間

鶴田:僕らのグループは住戸と配置というテーマで団地の屋外空間や住戸がどう住民の人に使われていたのかを記憶の中で意見を出してもらいました。

まず熊本型Dで大きかったのは住棟間に隙間を設けられた有機的な動線です。そこに関して言うと僕らの実感としては動線としてはあまり使われていなかったという意見が多くありました。この小路の空間は例えば倉庫を置いたり自転車を置いたりと、自分の所有しているものを置く場所として使われていることが多かったです。動線という機能というよりも団地の中の余白のスペースとして効果的な使われ方をしていたので、その点だけを見るのであれば動線的な計画にしなくても例えばそういう余白空間スポットのようなものを計画するだとか、他の計画の仕方っていうのがもしかしたらあったのかもしれませんないなと思います。

一方でその小路と直行するアスファルトの道は熊本型Dによって道幅が広くなったので緊急時に救急車が家の目の前まで入ってこれたりデイサービスの車が家の前まで来れたりという点では良かったと思います。

もう一つ、中央の大きな通りは住民の方が生活していく中で意外な使われ方をしていたのかなと思います。さっき話した小路のような路地空間で子供たちは遊びたいけども住戸が真横にあるので騒ぐことはできなくて、結果として大きな通りで車が通らないような時間帯にバスケットボールをしたりだとかサッカーをしたりというように遊びの空間にもなっていたということが意見としてありました。

［質疑応答］

野口:通路として小路が使われなかったということに関してで、動線として使われないのであれば物を置くスペースをただ計画すればいいていう意見があったんですけど、それってどうなんだろうなって思いました。仮設住宅団地は最低限というものを強く求められるものです。だから例えばただ単に物置スペースを作ることにはかなり大きなハードルがあるだろうと思います。実感として住民の人は仮設住宅の周りにある私的占有みたいなものをなんとなく思いやりによって上手に使いこなしている気がするから、あなたはここを使ってくださいというような計画をしちゃうと難しいんじゃないかな。

鶴田:県の方からの意見であったのは、時間が限られている状況でこの有機的な動線を作る作業がとても大変だったっていうのがあって、そういう意見も聞くと余白の空間を動線として使われるものとして計画していく方法以外にも、動線という機能は無くしちゃって単純に余白の空間をデザインして計画に落とし込むやり方は他にあったんではないのかと思います。

末廣:余白の量って言うか、そのばらつきをどれぐらいの割合でやったらいいのかっていうのも、ある程度適正のようなものがあるのかもしれないですね。今の話で思ったのは余白の話で言うと、玄関前に木で作られた階段におばあちゃん達が座って話をしていたってっていう話があって、ちょっとした玄関前の段差だったり南面の木の縁側だったりが機能的な意味はあるんだけれどもそれプラスアルファである種の余白空間にはなっていてそれが生活の飾り付けに使われていたりしたじゃないですか。これは個人のものとしてあるんだけども、さっき話してた住戸間の隙間っていうのは誰のものでもない空間ですよね。それは誰かと共有して初めて使えるような余白なのでそれとこれとでは少し意味が違うのかなと思います。そして住戸間の余白空間が意外に重要だったのかなと思います。

菊地:小路が小路として使われないっていうのは確かにそうなのかもしれないんですけど、使われなくても団地の中の視覚環境として見通しが所々にあるっていうのが効いてるんじゃないかな。大通りが真っ直ぐなのに対してこの小道を揺らしているのは意図的だろうと思います。人が通るか通らないかではなくて、見え隠れしながら向こう側に空間があるっていうのが分かることが結構環境としてはいいものがあるんじゃないかなあと思います。

末廣:元々の桂先生の計画の意図も、言い方としては小路と言っているけども東日本大震災の仮設でズボッと道が抜けているのを見てその気持ち悪さをどうにかしたくて視界が通るのをどこかで切りたいっていうのがあったんじゃないかな。あえてズラしているというところは彼は意図していたと思う。

田中:KASEIとしては例えば住民の人の意見を聞きながら小路にあるベンチのレイアウト変えてみるだとか、で、それでまた住民の反応を見てっていう風に、その余白の割合と分布をもう少しアカデミックに捉えて社会実験ではないですけどそういうことをしてみても良かったのかなと思います。

3 集会施設

キーワード

鍵の管理｜ボランティア団体｜地域と集会施設｜供給時期と役割｜集会施設の使い方｜居場所

荒木:みんなの家の使われ方については鍵の管理者に大きく左右されていて、結局は人が大事だと言う意見が多く出ました。一方で、管理者の負担っていうのがすごい大きくなって管理者をやめれなくなってしまったといったエピソードもありそこは問題だと思います。他にはみんなの家を解放すると使いやすいけれども、貴重品が盗まれたりといった問題があり、責任の所在の問題によってふらっと立ち寄れる場所にすることの難しさがあるのかなと感じました。

具体的なエピソードとしては、みんなの家にボランティアが大量にものを持ってきたせいで結局ものを片付けられなくなり、最終的にみんなの家が閉め切られてしまった例だったり。逆に良い例で言うと、小学校の校区の間に立っているみんな

の家は別々の校区同士の小学生が遊ぶ場になっていたり、仮設に閉じずに地域に開くと言う意味で重要な役割を果たしていたのかなと言うふうに思います。

みんなの家のタイプについては規格型みんなの家、本格型みんなの家、プッシュ型みんなの家で役割が変化していったと言う意見がありました。本格型はそもそもコミュニティがないからみんなの家づくりの意見交換がコミュニティづくりの一環になっていて、プッシュ型はコミュニティが成熟した後だから場を提供するって言う役割があって、みんなの家の役割自体が変わったのかなと思います。プッシュ型は供給が遅かったためにあまり使われなかったものもあるんですけれども、地域に対して広がりがあったりだとか。使われなくてもみんなで作ったっていうことはコミュニティのシンボルとしての役割として大きんじゃないかなと言う意見もありました。まず規格型を供給して、次に本格型を作って、最後補填するようにプッシュ型を供給すると言うフェーズをずらして供給する方法は有効だったんじゃないかなと思います。

使われ方については、使い方のルールを決めたり、使い方を提示したほうがいいんじゃないかと言う意見が出て、例えば、テクノ団地の本格型みんなの家の出窓のところは子供が遊ぶようにと想定されているのに実際は物置に使われていたり。ある程度使い方の提案というのが大事なんじゃないかと言う意見が出ました。

［質疑応答］

田中:プッシュ型は何で使われなかったと思いますか。

末廣:ちょっと遅すぎたっていうのもあるでしょうね。そもそも仮設住宅の戸数が少なかったから利用頻度も少なかったと言うのもあるでしょうね。

野口:みんなの家の種類により供給の目的が変わったというところがちょっとよくわかんなかったけれど。

田上:ワークショップのやり方も変わっていて、初動期の本格型みんなの家はコミュニティをどう作るかと言うのが最初の動機だったが、プッシュ型はもうコミュニティができているのでどのように地域に浸透していくかというのが大事で、それが変化したと言うことですよね。

野口:熊本では面積基準を下げたから設ける要件を下げることができて、20戸以上の団地にはみんなの家を供給できたけど、熊本は110団地のうちの55団地は20個未満なんですよ。だから半分以上の団地には集会所がない。ただ集会施設の計画に関してはすべてみんなの家で作ると言うふうに明記していて、熊本ではみんなの家以外の集会所のあり方をなくしているんですよね。東日本だと住棟と同じプレハブで、広い部屋をつけて集会所として供給されているんですけど、熊本ではその供給がされてなくて。空室になった3LDKとかを支え合いセンターが市町村に交渉して集会室として利用していたところもあるんですけど、計画としては熊本には供給されなかった。

末廣:供給ができなくても1室を使うと言う制度があればまだできたって言っ感じですね。

野口:戸建てにこだわった感じがありますね。

4 コミュニティ・生活

キーワード

団地の屋外環境｜自治会｜団地の内と外｜
見えない境界線｜コミュニティのフェーズ

福田:このグループは生活とコミュニティです。
みんなの家に関しては団地外の人も使ってくれて広がりがあって良かったっていうポジティブな話もあったんですけれど、団地外の中学生が使ってしまって、団地内の人が使えない話もあって、線引きをどこでするのかというところも考えないといけないと思いました。

次に自治会の話では、自治会長が家を再建して仮設を出てしまうと、後役がなかなか決まらなくて、そのせいで自治会活動がなくなってしまうようなこともあったようです。

あと団地内の見えない境界線と言う話もあって、大規模団地だと工区で分かれているので、例えばB工区のみんなの家にはA工区の人は行きづらいと言った感じがあったり、他にはさんさん2丁目団地は団地内をショートカットする周辺住民が現れだして、足音が怖いので団地周辺に柵ができたという話もあって、そういった団地の中や外に見えない壁があるようです。

コミュニティのフェーズの話もあって、KASEIが支援していく中でコミュニティのフェーズを意識していたらもっと効果的な支援ができたかもしれないと言う話もありました。

［質疑応答］

鶴田:コミュニティのフェイズと言うのは具体的にどのようなものになるんですか。

県職員:KASEIの活動の1年目と現在を考えたときに、取り組む内容を考える上で団地がどのような状態なのか、私が思ってたことなんですけど、今団地がこうなっているから次KASEIはこう動こうといった、仮設団地のフェイズを考えながら活動することが課題だったんじゃないかと言うことを言いました。

末廣:さっき話ありましたけど最初に行った時は特に、多くのとこから集まっている団地は新しくコミュニティを作らなきゃいけなくて、僕の経験だと仮設団地に入る前の避難所で意外と仲間ができていたりして、そのコミュニティが仮設住宅の中で継続するところや拡大するところがあり、だんだんコミュニティの塊みたいなのができる。で、あの人は嫌いだみたいな話も結構でてきて、最後は人がどんどん抜けていって、みんなどこに行ったかわからなくなると言う感じになるので。おっしゃるようにそれぞれのフェーズで違う取り組みをしたほうがよかったのかもしれないなと言う気もしますけど、ただどうやってコミュニティのフェーズを理解するのかが非常に難しいと思います。

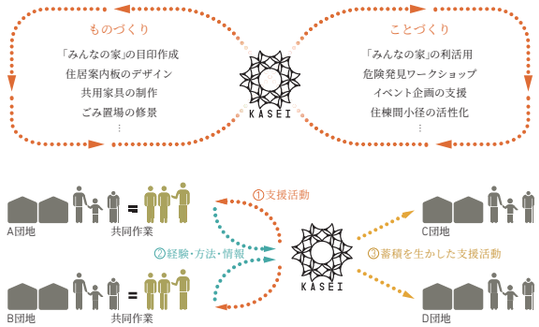
県職員:熊本でのKASEIの取り組みを1つの事例として、こういう各々のフェーズに対して取り組む内容には例えばものを作る時期、維持する時期、静観する時期というふうにフェーズ分けしながらまとめらないのかなと思います。

末廣:あとは今までのいろんな経験でコミュニティの変化は大方こんな感じになるだろうなというような漠然としたことはわかりそうだから、その辺を共有できていればいいですね。実際、支援に行ってる間はよくわからないですよね。結局よくしゃべっている住人さんはコミュニティの中のごく一部の人で、そのひとの見解以外にもあとあと聞くといろんなことがわかってくる、というようなことはよくあるし。だからそういうことを記録しておいて認識として共有しておくべきですね。

県職員:KASEIの活動が時間軸を伴って、総括して1つのモデルとして他の災害でも対応できるような形でできたらなと思います。

菊地成朋　九州大学人間環境学研究院 都市・建築学部門 教授
末廣香織　九州大学人間環境学研究院 都市・建築学部門 准教授
田中智之　熊本大学大学院先端科学研究部 教授
田上健一　九州大学芸術工学研究院 環境デザイン部門 教授
―
野口雄太　九州大学大学院人間環境学府都市共生デザイン専攻 博士後期課程
福田健　九州大学大学院芸術工学府デザインストラテジー専攻 博士後期課程
鶴田敬祐　九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻 修士課程
荒木俊輔　九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻 修士課程

気づきワークショップのときの様子



KASEIプロジェクトの活動スキーム

仮設住宅団地内の小路空間

本格型・プッシュ型みんなの家は住民との話し合いを通して計画されていった

熊本型D、その途中

熊本地震が発災してから3年が経過しました。熊本型Dと称される応急仮設住宅団地や集会施設「みんなの家」などの現状について報告をさせていただきます。加えて、この計画作成に携わった者のひとりとして、これまでの経緯にまつわる私見を記すことにします。

令和元年9月30日の熊本県データ集計によれば、全110応急仮設団地（16市町村）の平均入居率は29.6%（入居戸数:1,131戸.入居人数:2,599人）、最も入居率が高いのは阿蘇市46.5%、最低は宇土市6.7%となっています。既に10団地が解体撤去されています。木造35団地は17団地（48.6%）が市町村に譲渡され、災害公営団地として活用されてはじめ、残りの木造仮設団地でも譲渡が検討されています。県は災害救助法による応急仮設団地の基本的な使用期限2年が経過した為、2年の使用延長を申請しました。

約3割の入居率で仮設レンタル料を払い続けること、疎らな居住形態における入居者ケアや防犯上の問題から仮設団地集約を進める方針ですが、居住者生活圏という地理的な問題もあり、調整に苦労されていると聞きます。

これらの状況をふまえて熊本型D（KD）の基本的13項目について顧みることにします。

熊本型Dは、熊本地震発災後1ヶ月程度で緊急に計画されたものですが、計画の原点には2011年の東日本大震災でのくまもとアートポリス（KAP）「仙台みんなの家」や、2012年九州北部豪雨災害での「阿蘇みんなの家」の支援活動をおこなう中で、応急仮設住宅団地の実情と経年変化を見聞きし疑問を感じていたことが多々ありました。問題点を熊本県の方々と幾度も話題にし、互いに共有できていたことが熊本型D実現において重要であったと信じています。

隣棟間隔を少しでも広げること、3棟長屋形式とし住棟平行軸と垂直に路地動線を有機的に配置すること、住戸タイプ（6T,9T、12T）の配置は見守りとコミュニケーションに配慮すること、駐車場を分散配置にすることなどは、仮設暮らしが長期にわたることで増幅する閉塞感や孤独感などの弊害を緩和できるのではないかということが疑問への解決策になると判断し熊本型Dに繋がりました。

他の熊本型Dの大きな特徴としてRC基礎の木造仮設住宅と木造「みんなの家」があります。先述したように災害公営住宅にそのまま転用できるメリットは各市町村で高く評価されています。プレハブ仮設より隣棟間隔を1m増やし、3戸1形式としたことは有効であることも証明されたように思います。コストを抑え、プレハブより遮音・断熱効果を高め、小屋裏収納を確保するなどの地域工務店ならでの細かな気遣いなどが効果を発揮しています。RC基礎の木造にするために要する2週間強の工期延長は、災害救助法では内閣府からお叱りを受けるレベルの暴挙であると猛烈に批判されたことも確かですが、地震災害であったために敷地の選定に時間がかかったことや余震が続いたこともあって実現にこぎつけた経緯は、国への説明方法（理解の求め方）を含め、今後の大切な蓄積となりました。

東日本大震災後8年間での総木造仮設住宅率が約5%であるのに対して、熊本県では半年以内の着工で16%にも及びました。個人的には同規模の被害状況であれば30%程度まで木造化で対応できる可能性があると推測しています。

木造応急仮設住宅を災害公営住宅に転用するには課題があります。平成29年の改正で廃止されましたが当時内閣府告示によって1戸当たりの床面積が29.7m^2（19.8m^2、29.7m^2、39.6m^{2}の3タイプ平均）であったことです。6人以上の家族構成では最低49.8m^{2}は必要だからです。地域によっては3世帯同居の可能性を考えれば59.4㎡もありうるかもしれません。ただし、住居の大きさは各市町村の既存公営住宅との関係もあり論議の積重ねが求められます。建築関係者が準備しておくことは3戸1形式の中央に位置する住居（恐らく19.8m^2）の隣戸壁一部を開放できるような構造形式とプランニングについて実践的な開発を進めることだと考え、県や工務店の方々と機会あるごとに意見交換をスタートしています。身障者対応の福祉仮設住宅も初期条件として計画に組み込む方策も検討しています。

現在、KAPで精力的に取り組んでいるのが熊本型Dのシンボル的存在の「みんなの家」利活用計画です。応急仮設住宅団地整備に伴って「みんなの家」は、災害救助費によって84棟（62団地）整備されました。内訳は規格型「みんなの家」集会所（60m^2）28棟、談話室（40m^2）48棟、本格型集会所が8棟です。20戸以下の小規模仮設住宅団地の住環境改善のためにプッシュ型と呼ばれていた日本財団「みんなの家」が11棟整備されました。

更に、アトリエ・ワンと千葉学建築計画事務所の設計で日本財団の公民館型「みんなの家」10棟（40m^2、60m^2、100m^2、消防詰所併設等）が令和2年度迄に完成予定です。

桂 英昭 Hideaki KATSURA
建築家、くまもとアートポリスアドバイザー

KAPでは、今年度に「集会施設「みんなの家」利活用計画」業務報告書を提出しました。規格型と本格型を合わせ84棟の「みんなの家」の利活用により失われた地域コミュニティの核再生に寄与したいという願いを実現するために作成した被災市町村担当者（社会福祉課など）向けの手引きのようなものです。報告書は、利活用に係わる想定スケジュール、工事発注方式、概算工事費や活用例という内容で、建築系でない各市町村担当者の立場になって考えられています。仮設住宅の住まい再建継続利用支援事業（熊本地震復興基金事業）として位置づけられ、移転再利用工事費と設計・工事監理費の3／4が交付されます。対象期間は令和3年3月末までの24ヶ月としています。

この地道な報告書作成が功を奏して、災害公営住宅に転用された団地内活用10棟を除いて、移転活用の要望が70%（59棟）、検討中は14棟（17%）となっています。現時点で解体済みは1棟ですが、廃材を活用する目的で部材の一部が再利用目的で保存されています。本格型「みんなの家」については当初設計担当の建築家にお願いして地元住民の方々と意見交換して利活用する準備をおこなっています。この場合、規格型40m^{2}と合築などしてパワーアップすることも既に検討されています。規格型の利活用要望がある59棟については40m^{2}と60m^2、40m^{2}3連結、40m^{2}3連結などで規模拡大も考慮に入れ、地域コミュニティ施設や学童保育施設等として再生されるケースも話合っており、予期せぬ積極的な展開に期待が高まるところです。

他の「みんなの家」の話題といえば、KAPで取り組んだ響原復興住宅と甲佐町住まいの復興拠点施設整備事業にも斬新な「みんなの家」集会所が整備されています。

建設した「みんなの家」の8割強が様々な形で地域コミュニティの拠点として利活用され続けるであろうという驚異的な数値の背景には、KASEIの皆さんの献身的な活動があることを改めて感じています。災害救助法に則った行政上の応急施設であったならば、住民から是非残して活用して欲しいという要望の声があがること、或いは各市町村としても残すことに単なる建築物以上の意味があるという判断に至ることはなかったと思います。被災された方々の要望に応じたボランティア活動に対する評価は別として、植栽、棟上げ式の開催や本格型設計にかかわるワークショップ等々の災害救助法にはない住民参加型の仕組みづくりに果たした役割は、熊本型Dの計画だけでは成し遂げることのできなかった部分を補足する重要なものです。

KAPの新しいプロジェクトとして「熊本地震震災ミュージアム中核拠点施設整備基本設計」の公募型プロポーザルが発表されました。震災遺構である地表地震断層及び旧東海大学阿蘇校舎1号館に隣接して、展示学習機能、教育機能、交流機能、総合窓口機能を有する施設を整備する計画です。震災ミュージアム構想は県下の震災遺構を回廊式に繋ぐ形式になります。そのどこかでSASEI活動の果たした役割に関する記録を展示の一部に組み込むことを機会あるごとに進言させていただきたいと思います。

「熊本型Dを総括してください」という類いの質問を受けることがあります。これまで応急仮設住宅が完成した直後に熊本型Dで提示した13項目の履行率を中心に自身で数値的な検証を試みたことはありますが、総括については敢えて言及を避けてきました。

理由は、本稿で状況説明させていただいたように熊本型Dは、未だ「その途中」であることに他なりません。東日本大震災や九州北部豪雨災害の支援も継続している経験から、もう少し時間が必要であると考えています。「途中＝継続中」であることは明かですが、「その」の意味すること、つまり目指す到達点のようなものは一個人としては残念ながら提示するのに迷いがあります。現時点において、熊本震災復興支援における現段階までの取組みは、応急仮設住宅団地の住環境改善や災害公営住宅の建設、地区レベルのコミュニティ施設再生において既成概念に留まらない被災者に寄添う挑戦であり続けていると確信しています。

非公式には、行政、施工者、住民団体の方々、そして設計関係者の有志で、本稿で述べたような継続性を前提にした木材等の確保・ストック、技術者確保のための連携、応急仮設住宅団地の敷地選定なども含めた準備計画について雑談レベルの話合いをする機会も増えてきました。これが「その」の種であるような気がしていることを付記します。

最後になりましたが、KASEI活動が今年度で一区切りをするとお聞きして、先生方をはじめ、学生の皆様の純粋な支援活動に改めて感謝の表したいと思います。皆さんに参加いただいた作業での若々しい笑顔や汗は何ものにも代えがたいものです。皆様の得た体験を安心できる次世代の社会環境構築に繋げていただくことを願っております。

KASEIに関する論文のアトラス

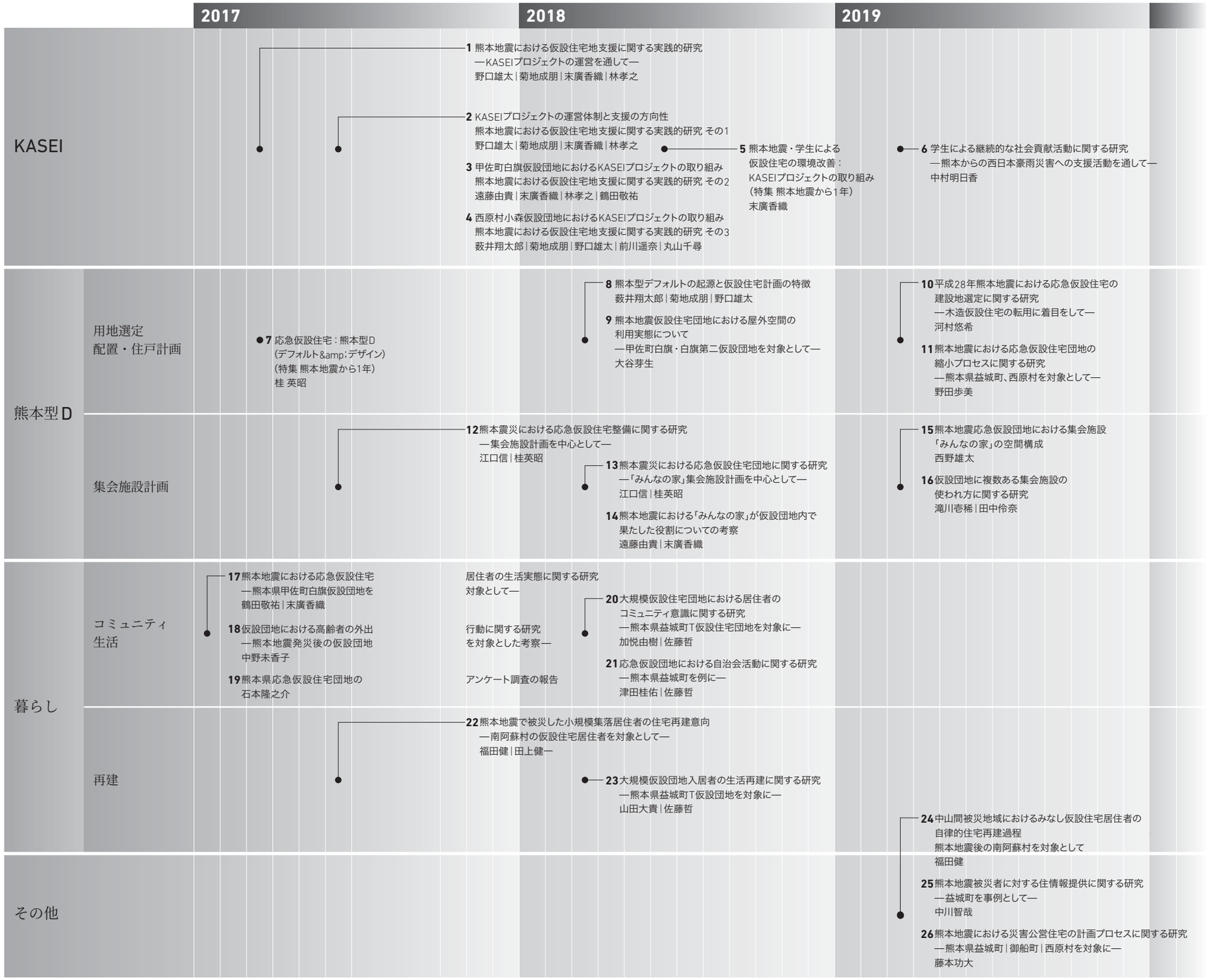
KASEIは被災地での直接的な活動に加え、調査研究を通して様々な角度から復興に貢献するための知見を論文という形で積み重ねてきた。2017年から2019年3月時点までにKASEI参画学生、教員によって熊本地震に関する論文は計26本発表され、九州内外で熊本地震に関する知見の共有、蓄積を行っている。

主な研究内容は「KASEI」、「熊本型D」、「暮らし」に大別され、「熊本型D」はさらに「用地選定、配置・住戸計画」と「集会施設計画」、「暮らし」はさらに「コミュニティ、生活」と「再建」に分類される（左図参照）。

「KASEI」に関しては、団体発足から活動が拡がっていく経緯、活動コンセプトや研究室同士の連携、具体的活動事例が報告されている（5,2,3,4,1）。またKASEIと他団体のつながりについても指摘されており（6）、KASEIの活動ノウハウが他の社会貢献活動にも活かされたことが示されている。「熊本型D」の「用地選定、配置・住戸計画」に関しては、計画背景や熊本型Dの要件、履行度合いに関する基本的かつ包括的な情報がまとめられている（7, 8）。その他にも木造仮設住宅計画に特化した研究（10）や屋外空間の利用実態（9）や団地の縮小プロセス（11）など時系列に沿った研究も展開されている。また「集会施設計画」については、基本的な計画の概要（12,13）に加え空間構成（15）使われ方（16）や果たした役割（14）、など複数の観点から研究が行われている。

「暮らし」の「コミュニティ、生活」に関しては、コミュニティや生活の実態、今後の見通し等についてアンケート、ヒアリング調査を基に明らかにした研究（20,17,19）の他、自治会や高齢者に注目した研究も行われている（21,18）。また「再建」に関しては生活再建に向けた課題（22）やコミュニティの継続が再建に及ぼす影響（23）等がテーマとなっている。「その他」の研究テーマとしてはみなし仮設（24）や災害公営住宅（26）、また被災者に対する情報提供（25）に関するものがあり、災害後の住宅問題を様々な観点から解き明かそうとする試みが行われている。

このように、研究室を単位として行ってきたKASEIのボランティア活動は多彩な研究成果という形でも成果を残してきた。テーマごとに様々な現状の問題点が浮き彫りになってきており、今後も調査研究を継続することで、仮設住宅に対する長期的な評価や社会実装性の高い提案など災害に対する建築的支援の在り方をより明確にすることができるのではないかと考える。



年間スケジュール
Annual Schedule

年	月	日	KASEI運営活動名	場所	主旨内容
2018	4	10	運営委員会	福岡県	活動予定、活動資金関係｜KASEI全戸調査の報告書について、組手什について、今後の活動についての確認
	5	1	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜第9回KASEI実行委員会について、活動資金関係、KASEI全戸調査の報告書について
		12	実行委員会	福岡県	これまでの KASEI と今からの KASEI
		22	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜第9回KASEI実行委員会について、年度末報告書について、今年度の活動費について
	6	19	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、年度末報告書について
	7	10	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、今後の活動についての確認
		31	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜年度末報告書について、活動費精算について、調査活動現状、第10回実行委員会について
	8	21	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜年度末報告書について、活動費精算について、調査活動現状、第10回実行委員会について
		2	実行委員会	熊本県	2年間の仮設住宅団地の使われ方をメンバー間で共有する、グループ発表
	9	28	運営委員会	福岡県	動報告、活動予定｜第10回KASEI実行委員会について、年度末報告書について、活動費精算について
	10	29	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、活動費精算について
	11	30	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜調査活動まとめの進め方、次回実行委員会について、今後のKASEIについて、活動費清算について
	12	26	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜調査活動まとめの進め方、今後のKASEIについて、活動費清算について
2019	1	22	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜次回実行委員会について、公民館型みんなの家の支援について、活動費清算について
	2	26	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定｜次回実行委員会について、プロジェクトまとめ作業、活動費清算について
	3	19	実行委員会	熊本県	3年間の活動・調査まとめ、これからのKASEI

メディアスクラップ
Media Scrap

掲載日
掲載紙
掲載面
特集ページ
記事タイトル

1. **2018.04.09**
日本テレビ
NEWS ZERO

2. **2018.11.06**
朝日新聞
「地域のために」

2

「地域のために」

よりよい仮設住宅を追究

仮設住宅の建築をたちよくしようと、九州・山口の大学などの建築学を学ぶ学生と教員が、グループを作って活動している。「九州建築学生仮設住宅建築改善（KASEI）プロジェクト」。2016年の熊本・震度7を含む一かけにできた、一つの研究室が始まった仮設住宅団地を拠点にしてきた。「つくり続けることをめざす。廃材を利用した学生たちの建築物を集めて、九州大学大学院（福岡市）の東寿哉准教授（建築学）の研究室などに学ぶ。

林田団地には、在住の九州北部豪雨で被害にあった47世帯100人が暮らす。未来研究室は団地の集会所を教材にしたつながりを持つ。学生たちが、集会所の前に敷いたブルーシートに木製ベンチやキッチン（組）を作ったり、住民が次々に集まってきた。

建築を専門とする、教員用を新設する。毎週と「住民」がいる、ある年、林田団地を訪れている。4年の女子学生は、「以前、性、「押し入れ用の棚を作

九州北部豪雨の被災地で、住民と一緒に家具を作る九州大の学生たち＝福岡県朝倉市

九州大などの建築学研究室

ね、2時間ほどで完成した。自分が設計した家が、考えると大きな変化は、ない、助かります」。

大学教員の西村悠准教授は「KASEIの活動を通じて、災害関係の研究をしたいと思った」。現在、本震仮設住宅の解体や利用を研究する。毎週末、林田団地を訪れている。4年の女子学生は、「以前は、建築学のことに興味があった。今は、居住の問題が人の暮らしのあるべき変化をもたらすのか研究している。関心の幅が広がりました」と話す。

仮設住宅の建築は、本震直後の仮設住宅で、廃材を放り出されるなか、東寿准教授は「建物を建てる時は、コミュニティーのあり方など、ソフト面を考えることが重要。住民と建築士の関係ができる中、学生は家の大切さを学べている」と話す。（田野芝）

活動助成・賛助会員
Supporters List

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

賛助会員
・アーキタンツ一級建築士事務所
・(株)あい設計
・(株)アイ・トレーディング
・旭化成ホームズ(株)
・(株)梓設計
・伊藤建築都市設計室一級建築士事務所
・(株)一原産業
・インターメディアー級建築士事務所
・エイチツーアーキテクト一級建築士事務所
・大石和彦建築アトリエ
・小竹組
・JR九州株式会社
・(株)志賀設計
・株式会社醇建築まちづくり研究所
・(株)染野製作所
・(株)竹中工務店
・(有)田中俊彰設計室
・株式会社日建設計
・株式会社日本設計
・(株)松山建築設計室
・(株)ミスターフローリング
・(株)ファクタスアーキテクツ
・古森弘一建築設計事務所
・北海道パーケット工業(株)
・(株)無重力計画
・(株)室園建設
・(株)メイ建築研究所
・柳瀬真澄建築設計工房
・(株)山下設計
・リズムデザイン一級建築士事務所
・(有)Y設計室

(50音順)

メンバー 一覧
Member list

実行委員

朝廣和夫 | 九州大学
赤川貴雄 | 北九州市立大学
秋元一秀 | 崇城大学
有馬隆文 | 佐賀大学
安齋哲 | 九州産業大学
岩元真明 | 九州大学
岩佐明彦 | 法政大学
井上朝雄 | 九州大学
鵜飼哲矢 | 九州大学
牛島朗 | 山口大学
内田貴久 | 長崎大学
内田文雄 | 山口大学
大月敏雄 | 東京大学
岡田知子 | 西日本工業大学
桂英昭 | 熊本大学
加藤浩司 | 有明工業高等専門学校
菊地成朋 | 九州大学
城戸崎和佐 | 京都造形芸術大学
黒瀬武史 | 九州大学
後藤隆太郎 | 佐賀大学
西郷正浩 | 崇城大学
佐久間治 | 九州工業大学
佐藤哲 | 熊本県立大学
志賀勉 | 九州大学
四ヶ所高志 | 福岡大学
柴田晃宏 | 鹿児島大学
下田貞幸 | 熊本高等専門学校
末廣香織 | 九州大学
曽我部昌史 | 神奈川大学
高橋浩伸 | 熊本県立大学
鷹野敦 | 鹿児島大学
田北雅裕 | 九州大学
田中尚人 | 熊本大学
田中智之 | 熊本大学
谷正和 | 九州大学
田上健一 | 九州大学
槻橋修 | 神戸大学
辻原万規彦 | 熊本県立大学
寺川政司 | 近畿大学
デワンカーバート | 北九州市立大学
徳田光弘 | 九州工業大学
冨安亮輔 | 東洋大学
中大窪千晶 | 佐賀大学
中薗哲也 | 崇城大学
根本修平 | 福山市立大学
朴 光賢 | 鹿児島大学
姫野由香 | 大分大学
平瀬有人 | 佐賀大学
藤原ひとみ | 有明工業高等専門学校
藤田直子 | 九州大学
星野裕司 | 熊本大学
前田茂樹 | 大阪工業大学
正木哲 | 有明工業高等専門学校
益田信也 | 近畿大学
増留麻紀子 | 鹿児島大学
三笠友洋 | 西日本工業大学
宮崎慎也 | 福岡大学
宮本佳明 | 大阪市立大学
安武敦子 | 長崎大学
矢作昌生 | 九州産業大学
横山俊祐 | 大阪市立大学

学生実行委員

有明工業高等専門学校 藤原研究室――青田興明 | 富増弥希 | 大政凪 | 柴田逸希 | 中川智哉 | 吉村春香 | 渡邉大貴 | 池上大智 | 宮田紳太郎 | 滝川壱稀 | 田中伶奈 | 富増弥希
大阪市立大学 宮本研究室――鍜治田祥尚 | 川口昂史 | 重光理沙 | 中嶋純一 | 菰口祐美子 | 中林顕斗 | 宮城太一 | 嶌田優実
大阪市立大学 横山研究室――野田裕介 | 土居和樹 | 冨永彗 | 海本芳希 | 中野隆太
大阪工業大学 前田研究室――東野健太 | 林雅大 | 新井悠太 | 隈元崚太
鹿児島大学 柴田研究室――河崎葉奈子 | 坂本直哉 | 須永達也 | 西垣信良 | 竹島光志郎 | 木村拓 | 穂満亮祐 | 明治強照 | 坂井一隆 | 上村佳子 | 坂元利伎 | 高尾奈緒 | 中尾有希 | 是松志門 | 佐藤由奈 | 後藤隆誠 | 森悠真 | 宮原佳美
鹿児島大学 鷹野研究室――林田真知 | 畠俊典 | 平川美憂 | 加藤佳輝 | 田村健太郎 | 赤松麻由 | 吉原佳代 | 稲留壮親 | 大脇友里加 | 柴田隆詠 | 田畑貴士 | 徳田優志 | 安長瑠人 | 相木雅史 | 池畑裕貴 | 王泓珺 | 長田亮平 | 吉永賢司
鹿児島大学 増留研究室――斎藤雅敏 | 西山知宏 | 森永涼平 | 松田寛敬 | 北之園裕子
九州大学 菊地研究室――野口雄太 | 前川遥奈 | 丸山千尋 | 薮井翔太郎 | 片岡美佳 | 沼口悠太 | 渡邊健太郎 | 佐土原洋平（志賀研究室）| 春山詩菜（黒瀬研究室）| 余語大地（黒瀬研究室）
九州大学 末廣研究室――林孝之 | 川谷大輔 | 遠藤由貴 | 谷口和広 | Wang Meng Ying | 鶴田敬祐 | Ester Peralta | 河村悠希 | 大谷芽生 | 奥村光城 | 下川祐樹 | 渕上貴代 | 東大貴 | 丸山智也 | 崎元誠 | Erdenekhuu Khongorzul | | 齋藤拓海 | 荒木俊輔 | 石橋佑季 | 原良輔 | 宋萍 | 吉岡大貴（趙研究室）
九州大学 田上研究室――野添脩斗 | 田中精耕 | 河合恵美 | 磯上千尋 | 福田健 | 有馬駿 | 中原有理 | 山中雄登 | 遠藤智樹 | エルサイドミラール | 鹿島悠平 | 明石卓也 | 大上ひかり | 茂田幸乃 | 島田貴司 | 福山拓也

九州工業大学 佐久間研究室――石橋凌 | 今井智也 | 今井智也 | 徳永晋 | 野口亮太 | 松山裕生 | 池尻賢矢 | 石川龍 | 井藁大希 | 西田淳
九州工業大学 徳田研究室――木村圭佑 | 大久美保 | 財前貴行 | 前川元貴 | 木嶋耕平 | 西田晴貴
九州産業大学 矢作研究室――久家孝允 | 倉富那美子 | 島田貴博 | 内野友貴 | 川口真愛 | 川野雅規 | 塩真光 | 志賀織晃 | 下津皓平 | 長家徹 | 大賀善冶 | 上原諒太郎 | 江崎駿 | 小澤成美 | 黒岩香帆 | 戸上夏希 | 平安茜音 | 村上優太 | 秦拓也 | 脇隼人 | 松石和也 | 清水史子 | 竹内瑞妃 | 田所佑哉 | 富永航太 | 山口祐 | 近藤るい | 森田滉己 | 山本彩菜 | 井本大智 | 濱津のぞみ | 松田湖都美 | 吉永広野 | 鋤田絢子 | 永田智陽 | 酒匂悠花
近畿大学 益田研究室――守田駿 | 藤原丈武 | 野坂響 | 大棚紀輝 | 真弓静七 | 樋口葵 | 福田菜々子
熊本大学 田中研究室――有光史弥 | 林原孝樹 | 吉海雄大 | 大城俊 | 小山遼太 | 福嶋海仁 | ワナズルフィア | 和泉秀 | 小川航輝 | 河口ひかり | 川端宏人 | 澤田拓巳 | 福留愛 | 藤田智之 | 古賀壮一朗 | 中村太紀 | 吉永優成 | 甲斐悠加 | 吉海雄大 | ワナズルフィア | 牛島美夏 | 立花和弥 | 武井碩毅
熊本県立大学 上拂研究室――森内貴士
熊本県立大学 佐藤研究室・鄭研究室――小濱光時 | 宇治野里帆子 | 加悦由樹 | 金城正汰 | 津田桂佑 | 鳥越柚子 | 中野未香子 | 山田大貴 | 桐原恵 | 倉岡沙世 | 坂田一起 | 高木なお | 竹内新乃 | 竹ノ内里衣 | 中尾有沙 | 西村七海 | 宮田真琳 | 柴田未来 | 林慎治 | 高島遥 | 平山響子
熊本県立大学 澤田研究室――境大介 | 橋本康隆 | 濱田兼士朗 | 竹本雛子
熊本県立大学環境共生学部居住環境学科――岩崎夏子 | 岩本航太郎 | 上村丹唯佳 | 内川裕佳 | 浦田将嗣 | 大坪達将 | 甲斐歩美 | 坂崎麻友 | 城島由紀乃 | 瀬口琴乃 | 大毛詩織 | 高濱杏香 | 谷川奈々 | 中村明日香 | 久宗秀成 | 古庄麗奈 | 本田愛莉 | 松本一輝 | 本井孝汰 | 芳崎大地 | 大家君香 | 川端祐貴 | 小河礼尚 | 嶋村友佑 | 高尾亜嘉利 | 中尾有沙 | 永野晃大 | 米原睦貴 | リュウルイナン | 加藤里恵 | 金氏竜哉 | 川嶋梨月 | 児玉誠二郎 | 田上雄基 | 西口昂輝 | 野田歩実 | 福住陽太 | 藤本功大 | 松岡紗生 | 飯星裕貴 | 緒方優風 | 加藤瑠華 | 高沢香苗 | 田北美早紀 | 新山舞 | 野崎由佳 | 野田理子 | 長谷川侑希 | 松永亜由美 | 松藤優紀 | 山口弥桜 | 山崎朱音
熊本県立大学総合管理学部 総合管理学科――岩崎貴夏矢 | 伊藤絢香 | 小川藍 | 金澤里奈 | 川原麻由 | 古谷彩乃 | 堺大介 | 里くるみ | 柴田友華 | 島添景子 | 園田卓実 | 竹本雛子 | 立山結 | 豊岡莉佳 | 長島美沙 | 長藤純矢 | 橋本康隆 | 畑扶綺子 | 濱田兼士朗 | 宮内康貴 | 森内貴氏 | 山口裕里香 | 阿部いずみ | 蛭子祐土
熊本高等専門学校 下田研究室――小嶋晃平 | 井島拓也 | 許斐ももこ | 永野蓮太 | 西田みずき | 藤井祐稀 | 藤掛佑基 | 松田崇志 | 吉村龍 | 藏原周太朗 | 吉海光大 | 永野蓮太（浦野研究室）| 藤掛佑基（松家研究室）| 井島拓也（入江研究室）| 松田崇志（上久保研究室）| 吉村龍（岩坪研究室）| 小嶋晃平（勝野研究室）
佐賀大学 平瀬研究室――副田和哉 | 荒牧優希 | 内藤沙耶 | 仲浩慶 | 山田章人 | 石井陽菜 | 坂本明文 | 広谷洸多 | 荒木達也 | 西諄子 | 大久保健太 | 池尻真人 | 江崎史浩 | 岳嘉鵬 | 中村実咲 | 永山貴規 | 林田大晟 | NUTHAWAT RATTANASUPORNCHAI | JONGSUEBSOOK JAKKRAVUTH | CHEN JUNYOU | 宮嵜晴基 | 上田佳明 | 西田羽沙 | 久保田圭悟 | 早川綾斗 | 谷口ぴあの
崇城大学 秋元研究室――安達大樹 | 一鬼正浩 | 笠井雄登 | 下川祥平 | 鶴えりな | 池田清華 | 中村公俊 | 中山毅男
崇城大学 西郷研究室――赤尾光彦 | 坂本涼太 | 園田彩夏 | 西田直生 | 吉村翔 | 谷本優希 | 中津美穂 | 古田佑季 | 野嶋柊子 | 二階堂匡佑 | 福田智大 | 森下鉄平 | 坂井郁途 | 大林隆寛 | 今野かなみ | 齊藤光樹 | 佐々木悠里 | 末永慎之助 | 西坂春香 | 飯開寛太 | 福山竜之介 | 藤岡夏葵 | 宮原颯太 | 屋形優太
第一工業大学――河野宏文 | 麻生大雅 | 金枝秀憲
長崎大学 安武研究室――甲斐悠介 | 竹村潤 | 山下素史 | 望月咲 | 石本隆之介 | 黒板未来 | 佐々木宏太 | 鶴地宏海 | 丸山一寿 | 一瀬泰斗 | 宇都宮想 | 加來夏美 | 嶌村燿彦 | 長岡康平 | 白水涼子 | 深澤恵 | 糸山健太 |
西日本工業大学 岡田研究室――天野健太郎 | 加藤幸生 | 黒田拓也 | 相良洋孝 | 高野菜穂 | 東幸貴 | 平田くるみ | 吉田成美 | 片山英子 | 島袋美鈴 | 津川七海 | 宮吉早紀 | 吉田郁乃 | ラム タン ダッド | 有瀬千絵 | 加藤魁人 | 国仲修真 | 是本健太 | 廣門優太
福岡大学 四ヶ所研究室――西野雄太 | 小田響 | 徳重拓斗 | 原昌平 | 山根あい | 井上和音 | 岩井巧 | 鈴木嗣巳 | 出口貫太 | 永松怜子 | 中元翔一 | 姫野勇輝 | 屋宜望 |
福山市立大学――内海果奈 | 新家健太 | 舟木花織 | 笠松千春 | 坂篤紀
山口大学――桑原建大 | 福井啓晃 | 江口透悟 | 藏薗悠介 | 齋藤拓海 | 千三木唯央里 | 西山菜月 | 松永悠 | CHOW YI XING | 今冨良介 | 高橋弦士朗 | 中尾汐里 | 瀬戸口佳奈美 | 菅元翔 | 吉永裕樹 | 小崎由香 | 赤松恵 | 小坂田祥太 | 黒田百夏 | 花野修平 | 三崎令羅 | 石口真菜 | 安部彩華 | 新垣大貴 | 塩谷玲奈 | 中村勇志 | 呉英里子 | 北村祐樹 | 中谷壮悟 | 濱友彦 | 蒲池航洋

編集後記
Postscript

鶴田 敬祐　Keisuke TSURUTA
2018年度 学生代表
九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻修士課程

2018年度の前半の半年間、KASEIプロジェクト3年目の代表を務めさせていただきました。私は熊本地震が発災しKASEIが結成され現在までの間、本プロジェクトのメンバーとして支援活動に関わらせていただきました。

3年という住まいとしては短い時間の中でも絶えず仮設団地の環境は変わっていきました。みんなの家建設などの入居直後の慌ただしい時期。そして徐々に生活が落ち着きはじめ、その時期にはすでに仮設を退去される方が出始めていました。そしてさらに退去が進んだ現在では熊本県内の仮設住宅居住者の数は4,000人を切り仮設住宅にも役目の終わりが見えようとしています。私が支援のためによく通っていた仮設団地も当初は100世帯以上が住まわれていましたが現在では8世帯を残すのみとなりました。KASEIとして、このような様々な段階に応じてどのような支援をおこなっていくのかというところに難しさがありました。そのような変化し続ける状況に対し私たちは手探りながらも、ものづくり・ことづくりの支援の活動はもちろんのこと、仮設に住まれている方々の生活状況を把握するために行ったアンケート調査、みんなの家の使われ方を記録するための360°カメラ撮影活動、団地及びその周辺の使われ方を記録するための団地ドローイングなど、様々な活動を展開していきました。

そのような活動してきた3年の間にも日本の各地で大きな災害が立て続けに起こっています。2017年7月の九州北部豪雨災害の際には被災地が近かったこともあり私たちは熊本で培ってきた経験を生かし支援を行いました。このように熊本地震以降の災害への支援にも熊本でのKASEIの経験が非常に役立ちました。今度はこのKASEIの仕組みや経験を次に起こるかもしれない災害のためにつなげていかなければなりません。そしてこの報告書がそのときにわずかながらでも役に立つものになることを願っています。

先日2019年8月に行った12回目の実行委員会でKASEIは一旦中締めとなりました。今後は以前のような大きな組織での活動とまではいきませんが引き続き残された仮設住宅の住民の方々への支援や新しく建設され入居も始まっている災害公営住宅団地への支援活動なども行っていければと考えています。

最後になりましたが、KASEIの活動は多くの方々にご賛同ご支援いただきました。心から感謝申し上げます。また本プロジェクトにご協力いただいた関係者の皆様、各仮設住宅団地の住民の皆様には様々な場面でご指導・ご助言を多くいただき、支援する側の私たちが逆に多くのことを学ばせていただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

KASEIプロジェクト 年次報告**2018**
KASEI Annual Report 2018

発行：
KASEIプロジェクト実行委員会

編集：
佐賀大学平瀬研究室

デザイン：
中野豪雄、鈴木直子（中野デザイン事務所）

2020年3月1日発行

KASEI

Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEI